



社団法人日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2007



目次

開催趣意	1
スケジュール	2
開会式・1日目全体会	3
開会挨拶	4
省庁プレゼンテーション	5
全体会テーマ「生物多様性」	8
講演「第3次生物多様性国家戦略が目指すもの」	8
講演「企業が取り組む生物多様性保全」	11
2日目ワークショップ	15
オプション・プログラム	37
JEEFの集い	45
3日目全体会・閉会式	51
テーマ別「今後の戦略会議」報告	52
地域ミーティング報告	55
閉会挨拶	56

開 催 趣 意

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育があります。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切です。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人（または団体）がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要です。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPOなど環境教育の現場で働く人々同士のつながり＝ネットワークを大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えております。

そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、このミーティングを開催いたします。

特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であることです。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持っています。

テーマ

このミーティングは、主に下記の2点を全体のテーマとしています。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場
～人と人、思いと思いが会うことで、新しいことが動きはじめます～

今年の特徴

通算21回目の今年は、「生物多様性」をキーワードに、1日目全体会で行政・企業・NPOの方からご講演をいただきます。また、2日目には主催理事の実施による「生物多様性」についての3時間ワークショップを午前・午後と2本実施いたします。

それから、環境教育で今どんな活動が行われているのか、「今が旬の活動事例紹介」ではたっぷりと時間をとって、皆様から活動の最新情報をプレゼンテーションしていただきます。各地で環境教育を実施している企業や行政や自然学校の中で、今何を最も大事な環境教育のテーマとしているのか、どんな課題、新しい挑戦があるのかを発表しあい、共有しましょう。

そして、それぞれの活動を理解し、刺激を受け合いながら、これからの環境教育活動につなげていただきたいと思います。

また、自然体験型の環境教育プログラムの体験ネットワークづくりのために、プレイベントを行います。

スケジュール

■ 1日目：11月17日（土）

10:30～	受付開始
11:30～12:15	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画（自由参加）
13:00～13:45	開会式・全体会 開会挨拶 省庁プレゼンテーション テーマ「生物多様性」 講演「第3次生物多様性国家戦略が目指すもの」 講演「企業が取り組む生物多様性保全」
14:45～15:45	休憩・チェックイン
15:45～18:15	今が旬の活動事例紹介
18:30～20:00	夕食
20:00～20:30	休憩・移動
20:30～22:30	スライドプレゼンテーション JEEF 理事の何でも相談所 情報交換会

■ 2日目：11月18日（日）

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ（自由参加）
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	休憩・移動
9:00～12:00	3時間ワークショップ 50分プレゼンテーション
12:00～13:30	昼食・休憩
13:30～16:30	3時間ワークショップ
16:30～17:15	休憩・移動
17:15～18:15	JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
18:30～20:00	夕食
20:00～22:30	スライドプレゼンテーション JEEF 理事の何でも相談所 情報交換会

■ 3日目：11月19日（月）

7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	チェックアウト
9:00～11:30	テーマ別「今後の戦略会議」
11:45～12:30	全体会・閉会式 テーマ別「今後の戦略会議」報告 地域ミーティング報告 閉会挨拶
12:30～13:00	休憩・移動

1 日目

開会式・全体会

開会式

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム理事 佐藤初雄

開会挨拶 : (社)日本環境教育フォーラム会長 北野日出男

省庁プレゼンテーション: 文部科学省スポーツ・青少年局青少年課 関根章文氏

国土交通省河川局河川環境課 太田敏之氏

国土交通省港湾局国際・環境課 井上岳氏

林野庁計画課森林総合利用・山村振興室 高木鉄哉氏

全体会テーマ「生物多様性」

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム理事 横山隆一

講演「第3次生物多様性国家戦略が目指すもの」 :

環境省自然環境局自然環境計画課 渡邊綱男氏

講演「企業が取り組む生物多様性保全」 :

(株)リコー 社会環境本部 岸 和幸氏

開会挨拶

(社)日本環境教育フォーラム会長 北野日出男

皆さん、こんにちは。ようこそ清里ミーティング 2007 へご参加下さいました。225 名おみえいただいたそうで、本当にありがとうございます。

はじめに、非常に残念なことです。長い間、日本環境教育フォーラムの顧問を務めていただいておりました、元(財)国立公園協会会長の大井道夫さん、日本経団連名誉会長の平岩外四さんのご逝去のご連絡をいただきました。お悔やみ申し上げたいと思います。

本日はご後援いただいています各省庁、日本環境教育学会のご来賓の方に多数おみえいただきまして、後にプレゼンテーションもしていただきますが、厚く御礼申し上げます。また、毎年のことですが、このミーティングの運営を隅から隅まで引き受けて下さっている財団法人キープ協会、山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターのスタッフの皆様、本当にありがとうございます。

清里ミーティングは 1987 年 9 月にスタートしました。今年で 20 周年を祝って、6 月 21 日には東京代々木の国立オリンピックセンターで「21 世紀における環境教育を考える」というタイトルで国際シンポジウムを開催しました。ここにも多数の方にご参加いただきましたこと、厚くお礼申し上げます。現在もう一つ、出版の企画をしております、JEEF20 周年記念誌の発行を 2008 年 5 月末を目処としています。その読者の対象に 20 代の方を考えております。データではここに 20 代の方が 30%いらしているようですが、ぜひ購読して下さい。生きる力を与える、そんな気持ちで関係者一同、執筆しております。

昨年の清里ミーティング開会式の時に、僕が JEEF の老齢化という話をしたのですが、閉会式で横山理事から、このミーティングには若い人が非常に多くて、老齢化はしていないというのを拝見しました。このミーティングは決して老齢化していません、老齢化しているのは JEEF スタッフですので、20 代の方たちは、是非 JEEF のスタッフに喝を入れて下さい。

今、日本の新聞記事は暗いことばかりですが、ここ 1 週間で、私にとって明るいニュースが飛び込んできました。環境を考えるニュースです。僕自身が感じたことは、11 月 14 日の新聞記事に出ていましたが、月探査機かぐやから「地球の入り」の映像を送ってきましたね。その後もホームページで何度も見ましたが、すごいな！やったな！とすごい感動をおぼえました。かぐや姫の夢はなくなってしまったわけですが、物理的な事実を送ってくれて、これはすごいことだなと思って、最近にないような感動でした。

同じ日にほんの小さな記事でしたが、地下 3,500m の岩石からバクテリアの一種を発見し、それを採取してきて、地上の生物多様性よりももっと土壌動物を含め、地下には地上にいる以上の生きものが息づいている、ということが書いてありました。地下にも目を向ける必要があるということ非常に強く感じました。

私達は多少なりとも地球を外からも中からも見る、という時代に生きているわけです。月表面の痘痕のようなクレーターを見て、地球には大気があって良かったなとつくづく思いました。もしなかったら痘痕だらけだったと思います。しかも -300℃のあのすごい環境、それに比べて、なんと地球って素晴らしいのだろうと改めて思いました。偶然に偶然が重なって生まれた地球、話をできない自然に対して、僕らがその自然を守っていく使命を今後ともなお持ち続けていかなければならないと、本当に強く感じました。

関係者の努力で、今回は全体会を「生物多様性」としていただきました。その他に 21 の分科会などがあります。そのような学びの場を通して様々な専門家の方たちと交流いただいて、21 世紀に生きる子ども達に、大きな励ましの言葉を与えてあげられるようなことをしていただきたいと思います。

2 泊 3 日を有意義に過ごしていただくことを祈願して、開会の挨拶とさせていただきます。

司会

(社)日本環境教育フォーラム理事 佐藤初雄

このミーティングは、1987 年に『清里フォーラム』として始まりました。翌年から『清里環境教育フォーラム』として開催されるようになり、1992 年に日本環境教育フォーラムができてから『清里ミーティング』と呼ばれるようになりました。1987 年の 1 回目から数えて今回で通算 21 回目の開催となります。

ご後援をいただいている各省庁の方をご紹介させていただきます。環境省自然環境局自然環境計画課の渡邊綱男様、文部科学省スポーツ・青少年局青少年課の関根章文様、国土交通省河川局河川環境課の太田敏之様、国土交通省港湾局国際・環境課の井上岳様、林野庁計画課の高木鉄哉様です。また、本日はお見えではないですが、環境省総合環境政策局環境経済課環境教

育推進室の中島恵理様、農林水産省農村振興局企画部農村政策課の杉原裕幸様が明日のワークショップからご参加されます。行政との協働を考える時にいろいろとお話をさせていただくとよろしいかと思います。

先程、会長からの挨拶にもありましたが、山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターは、環境省の補助で平成 6 年に山梨県が設置したものです。清里ミーティングはこのセンターができてからずっと山梨県の全面的なご支援を受けながら、毎回この場を主会場に開催しております。本日は山梨県庁より、森林環境部循環型社会推進課の広瀬正三様にお越しいただいております。

以上の方々が、ご後援いただいている関係者の皆様です。

省庁プレゼンテーション

文部科学省

文部科学省スポーツ・青少年局青少年課 関根章文氏

文部科学省は、先程の北野さんのご挨拶の中でもふれていただきましたとおり、「生きる力を育む」それから「21世紀の子どもたちの健全な育成を目指して」ということで、行政を担当している部署でございます。文部科学省というと学校教育のイメージが頭に浮かぶと思いますが、我々の部署は社会教育の中で青少年を担当する部門でございます。

今日は私も清里の駅から歩いてきたのですが、この3日間に臨む私の目標といたしましては、まず清里のきれいな空気をいっぱい吸って、この3日間でエネルギーを充填して、また週明けから仕事に生かしていきたいなと思います。私も実は今回初めての参加でございます。皆様と一緒にいろいろな情報を得ていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

お手元の資料「文部科学省における環境教育・環境学習関連施策予算額一覧」には、今年度(19年度)と来年度(20年度)の概算要求(要求中)の項目が載っております。学校・社会教育・家庭教育に関するものと、大きく3つに分かれております。私の担当は、社会教育の環境に関する子どもの体験活動の推進ですので、それ以外の部分の詳細についてはお答えできないところもございますが、ご了承いただきたいと思います。この場をお借りして、皆さんに、昨年の清里ミーティング以後の文部科学省の動向について、環境教育・環境学習に関係することにふれさせていただきますと思います。

まず大きなものとしましては、昨年12月に教育基本法が改正されました。環境教育にご関心のある方はご存知かと思いますが、第一章第二条四 教育の目標のところ「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」という規定になり、新たに「環境の保全に寄与する態度を養うこと」が明記されております。それに伴い、文部科学省としましては、今年の6月には学校教育法を改正し、義務教育の目標として「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神ならびに環境の保全に寄与する態度を養うこと」と新た

に規定しております。

また、最近メディア等でも取り上げられていますが、学習指導要領の改訂が検討されております。先日11月7日に途中の審議のまとめが公表されておまして、只今パブリックコメントを募集しているところでございます。ここでいくつかご紹介させていただきますと、「持続可能な社会の構築が強く求められているため、教育の果たす役割が重要である」とふれられていますし、「豊かな自然や身近な地域の中での様々な体験活動を通して、自然に対する豊かな感受性や生命を尊重する精神、環境に対する関心等を培うことが必要である。そして、幼児教育の段階から発達段階に応じて自然体験活動などの体験活動を引き続き進めていく必要がある」と、審議のまとめのところでは挙げられています。CONE(NPO法人自然体験活動推進協議会)主催の「幼少期の自然体験活動を促進するために必要な指導者養成のあり方を考えるシンポジウム」を開催しますが、こちらでも学習指導要領の審議のまとめをいち早くそれよりも前に計画を進めて、民間・行政・学校教育(幼稚園も含む)を巻き込んで、法律上も踏まえながら、環境教育・自然体験活動等を促進していきたいと考えております。

これから21世紀の子どもたちのためにということで、是非とも皆さんのお力添えをいただきたいと思います。雑駁でございますが、以上で文部科学省からの説明を終わらせていただきます。



国土交通省河川局

国土交通省河川局河川環境課 太田敏之氏

河川を活かした環境教育を担当しております。国土交通省河川局が取り組んでおります環境教育につきまして、少しご紹介をさせていただきます。 「子どもの水辺再発見プロジェクト」というものを立ち上げて進めております。これは平成11年度に創生された、文部科学省・環境省・国土交通省の3省が連携して取り組んでいるプロジェクトです。市民団体・教育関係者・教育委員会と私共河川関係者が一体となりまして協

議会というものを立ち上げ、その中で議論をし、川の中で子どもが遊べ、環境教育ができるような場所を登録していただく制度でございます。そうした所を「子どもの水辺」と呼んでおりますが、そうした所に対しては、「子どもの水辺サポートセンター(RAC)」がライフジャケットの貸し出しや情報提供などをするという取り組みをしております。平成11年から始まりまして平成19年3月末で、全国248カ所に「子ども水辺」といった場

所が登録されております。「子ども水辺」に登録いただきますと、「水辺の楽校プロジェクト」で瀬や淵を作ったり、ワンドや遊歩道を作ったりという、ハード的な整備を行っております。これにつきましても全国で262カ所、「水辺の楽校」として登録され整備がされております。

川に来ていただき皆様に活動していただきたいということですが、川も非常に危険な部分があるということで、今年6月に「急な増水による河川水難事故防止アクションプラン」を策定しております。携帯電話で雨の情報、川の水位の情報などが得られるようになっております。また、川沿いの看板等にもURLを書いたシール等をつけまして、現地で川の情報を得られるように工夫してございます。今回持ってきておりますが、「ストップ・

ザ・河川水難事故」というリーフレットを作成しております。こういった取組みで川を安全に利用していただき、且つ川を活用して環境教育に役立てていただきたいということで、いろいろな取組みをしております。

これを機会に川の方にも興味を向けていただければと思っております。

※「川の防災情報」URL <http://i.river.go.jp/>



国土交通省港湾局

先程、河川局さんから「水辺の楽校プロジェクト」のお話や環境教育の場に活かせるような河川づくり、あるいは河川整備の説明がなされました。それをだいたい海に置き換えていただければ、私共が行っていることになります。「水辺の楽校プロジェクト」に対応するもので、私共は「海辺の自然学校」というもので、全国に直轄の40くらいのお小さな事務所を設けております。そこを通じて干潟観察会や、監督測量船という船を自分達で運航しているものですから、子どもにライフジャケットをつけて乗っていただき、波の強さや海の厳しさ優しさというものを自ら体験していただくということをしております。先程、文部科学省さんから予算の説明がありましたが、国土交通省は環境教育を自分達でやりますということ、財政当局に非常に怒られるものですから、コソッと隠れてこういう手伝いをさせていたでいております。河川局も同じような状況ではないかと推察いたします。環境教育であれば、文部科学省と環境省の予算でやりなさいと厳しく指導されるわけです。

昨年からの動きでございますが、1つ大きく変わったのは、海で活動するというのは、安全や健康の管理をしながら、皆さんに楽しく活動していただかなくてはならないわけで、非常に

国土交通省港湾局国際・環境課 井上岳氏

難しいことです。それでも海猿ではないですが、海に対する熱い方がいらっちゃって、そうしたNPOの活動をしている方々のネットワーク化あるいは、難しい技術の伝承や意見交換の場ができればいいなということで、「海に学ぶ体験活動協議会(CNAC)」設立のお手伝いをさせていただいたところなんです。今年5月、正式にNPO法人登録をして本格的に活動を開始いたしました。

今回、清里ミーティングと同じような形で、主に海をフィールドとする方の意見交換、あるいは行政との会話の場を作りましょうということで、全国フォーラムを来年2月1日～2日に佐賀県唐津で行いますので、海の世界の熱い方と飲み交わしたいという方がいらっちゃれば、是非こちらにも参画いただければと思います。



林野庁

林野庁計画課森林総合利用・山村振興室 高木鉄哉氏

林野庁では、森林環境教育を推進しております。この森林環境教育というのは何ぞや？という話ですが、林野庁が環境教育を行うにあたって財政当局の理解を得るために森林とつけているわけではございません。森林環境教育とは、森林内での様々な体験活動等を通じて人々の生活や環境と森林との関係について理解と関心を深める、と平成14年の森林林業白書に定義づけています。林野庁としましては、林業や森林についての理解を得て、将来的には実際の森づくり活動に参加いただいたり、国

産材の利用を進めていただいたりすること、それから今、林業が非常に傾いており、一方で地球温暖化防止の目標達成のために森林の整備を進めていかなければいけない、そういったことにご理解を得る、ということの政策ツールとして価値があるということで、森林環境教育を推進しております。森林環境教育の担い手は誰になるのかという話ですが、いろいろな所に〇〇公園とか県民の森、市民の森というものがあります。それからNPO法人、自然学校、様々な資格を持つ指導

者、緑の少年団、企業、国有林その他、とにかく森林の中で体験的な活動を行うものは全て森林環境教育なのではないかと考えております。

では、林野庁が推進している森林環境教育はどのようなことをやっているかですが、まず1つ目には指導者育成ということがございます。よく知られているものでは、森林インストラクターという制度がございます。これは森林レクリエーション協会という所が行っているものです。都道府県では、独自に行っている指導者育成もございます。

それから新しく、平成19年度から始めた事業で、実際的には20年度以降になるかと思いますが、森林環境教育のネットワークも念頭に考えた企画調整能力のある有能な人材育成を考えているところです。その他、ホームページを通じた情報発信、テキストの作成、林業関係の高校・大学でのインターンシップの推進、林業研究グループへの体験学習の推進、緑の少年団活動への支援、文部科学省と連携した体験活動などがあります。

また、平成20年度から農林水産省・文部科学省・総務省の3省で「子ども農山漁村交流プロジェクト」という、子どもに1週間農山漁村で体験活動をしてもらうということを始めようとしているところです。国有林の方でも、そのフィールドを体験

活動や森林環境教育に使えるようにするという取り組みがあり、「木育」という木の良さから利用の意義を学ぶという活動も推進しようとしております。

少し森林環境教育から離れて宣伝になりますが、現在、政府一体となって「美しい森林づくり推進国民運動」というものを始めています。中味としましては、国産材の利用を通じた適切な森林整備、森林を支える地域づくり、森づくりへの直接参加を総合的に推進していくということで、日本環境教育フォーラムにも参加していただいているところです。これを成功させるための3つのお願いがあります。1つ目は森林づくりのボランティア活動に積極的に参加していただきたい。2つ目は、国産材さらに言えば間伐材を積極的に使っていただきたい。3つ目は、美しい森林づくりについて家族や友人など身近な人に広げていただきたい。そういったことをお願いしたいと考えているところでございます。



司会

(社)日本環境教育フォーラム理事 佐藤初雄

省庁の皆さんありがとうございました。環境教育というのは非常に広い分野の教育だと思います。私達が環境教育を行う際に、行政と連携あるいは協働することによって、より多くの人達に環境教育という考え方を広めることが可能だと思います。従いまして、今回の清里ミーティングでも、連携・協働しているということ、国の行政の立場で環境教育の在り方や考え方をご披露いただき、明日午前中に私が担当する「行政との協働を考える」というワークショップで、省庁の方々と一緒に考えてみたいと思います。そのために各省庁からご説明をいただきました。

本日はまだいらしていませんが、環境省と農林水産省からの資料が皆さんのお手元にあります。環境省の資料の中にESD(持続可能な開発のための教育)という言葉があります。ここに大きな柱を立てて、予算をとりながら事業をしていこうという方向があります。林野庁の高木さんからお話がありましたが、農林水

産省の資料には、小学生120万人に長期の自然体験活動をさせようという予算があります。農林水産省・文部科学省・総務省が連携をして、環境省も絡んでいる形で、来年度から学校教育の一環として事業の取り組みを始めると、ということも書かれておりますので、これから環境教育もいろいろやらなければ

ならない仕事は沢山ある、それだけ社会的な課題になっていることではないかと思えます。是非とも行政とも連携をしてこういった事業の推進に皆さんも寄与していただければありがたいと思えます。



全体会 「生物多様性」

司会

これから全体会では、3日間を通した21回目のキーワードを提示して、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。キーワードは「生物多様性」です。中身は何か、今からの全体会の話聞いていただければ、それなら普段気づいている、気をつけている、そういうことなら説明できるな、ときっと思われると思います。そんなに難しいことではないのですが、生物多様性という言葉そのものが非常にわかりにくいものなので広まりにくい状況が続いています。気候変動による地球温暖化ということは、皆さんが誰でも知っていることになってきました。朝起きて暑いと、「地球温暖化だな」という言葉を思うけれども、「生物多様性が低いな」と思う人は滅多にいないと思います。その言葉を「自然の恵み」という言い方をすることがありますが、生物多様性ということをもっと知り合っ、これを確

(社)日本環境教育フォーラム理事 横山隆一

保していくということはとても大事なことです。

そういうことを先ず環境省自然環境局の渡邊さんから環境省としての問題意識、今なぜ生物多様性なのか、というプレゼンテーションをお願いします。

それから、(株)リコーの岸さんから、会社というものが生物多様性を守る、確保するというところにどんなふうに取り組もうとしているのか、問題意識とプランについてお話いただきます。



第3次生物多様性国家戦略が目指すもの

環境省自然環境局自然環境計画課 渡邊綱男氏

今回清里ミーティングで生物多様性というテーマを取り上げていただき、また、声を掛けていただいております。第3回目の生物多様性国家戦略というのを1年くらいで作業してきて、今週の火曜日にまとまりました。今月の下旬には政府全体の意志として閣議決定という形で最終的に決まる予定です。3回目の国家戦略で何を目標そうとしているのか、ということをお皆さんにお伝えできたらと思います。

この生物多様性国家戦略の基になったのが、生物多様性条約です。15年前の5月22日にナイロビでできました。そしてリオの地球サミットに持ち込まれました。何故この条約ができたかという背景ですが、80年代に熱帯林の減少があったり、地球全体の種の絶滅の進行といった危機感から生まれた条約かと思えます。ワシントン条約、ラムサール条約という特定のテーマの条約があったわけですが、その大きな傘となるような、地球全体の沢山の生物や息環境を守る基本法となるような条約をつくらうということで、生まれたものです。その時に名前として生物多様性(biodiversity)というのをキーワードにしてこの条約が生まれました。条約の目的に、生物の多様性の保全と持続可能な利用と、もう1つ途上国の強い主張があって、熱帯の植物から生ずるその利益を先進国がほしいままにするのではなくて、原産国にも公正・衡平に還元をするのだという3つ目の目的が加わりました。そのことがあって、今190の国が入っていますが、アメリカはまだ入っていないという現実もあります。

この条約が「生物多様性とは？」と聞いて挙げている3つの生物多様性があります。包括的に生物多様性を守っていく、いろいろなレベルのものを対象にしようということで3つ挙げられました。サンゴ礁や森や湿原といったいろいろなタイプの生態系があるという、1つ目の多様性。2つ目にはいろいろな種がある。3つ目には同じ種の中でもその地域によって遺伝的な性格が違って色々なタイプがあり、環境の変化を乗り越えて生物が存続し増えていくということが大事だ、という多様性。言葉を換えて言えば、色々な個性があってそれがまたつながりあっている、ということかと思っています。そして私たち人間もそのつながりの中の一員であり、このつながりの恵みを受けている一方で、つながりを壊す存在でもある、そういう関係かと思っています。

この条約に入りますと、それぞれの国は多様性保全の国家戦略をつくるという仕組みになっています。日本は条約に入って、最初に大急ぎで第1回目の国家戦略をつくりました。平成7年でした。その時、各省の既存の政策をホチキスで止めただけで



はないか、という批判をたくさんいただいたわけですが、当時を思い起こしてみれば、生物多様性という言葉が政府各省の中でも「一体それは何だ？」という状況だったかなと思います。ここでは、生物多様性という新しいキーワードのもとに様々な省庁が1つのテーブルについたということが、1回目の意味だったかと思います。

それから7年経って、第2回目の戦略をつくりました。この7年間は自然や生物多様性をめぐって色々な動きがあったと思います。愛知万博の計画をめぐって海上の森を守りたいという市民の声や、国家プロジェクトの根本的な計画変更につながって、海上の森の保全が実現しましたし、諫早の干拓では潮受け堤防の締切があって、それを機会に干潟に対しての社会の関心が一挙に高まったということもありました。そういった社会の関心を背景として、様々な省庁の河川や海岸や森林などの施策の中に自然や多様性が組み込まれ、雪崩をうったようにそういった動きが出た時期でもあったと思います。その中で省庁再編があって環境庁が環境省になりました。そういう流れを受けて第2次の戦略をつくりました。その時のねらいは、今まで原生的な自然、あるいは貴重な動植物の保護に重点を置いてきた自然保護行政から、その部分を強化しながらもっと身近な自然まで、施策の対象を広げていきたいということでした。2回目の戦略のあらましでは、3つの危機というのを挙げました。開発によって破壊するという1つ目の危機。逆に農山村で人が減少し高齢化が進んで、山や里地里山の手入れができなくなることで、人と自然のバランスが壊れてしまっている、特有の動植物が減っている、そういうことが2つ目の危機。外来生物による影響という3つ目の危機。こうした3つの危機が進行していることに対して、手を打っていかうというのが2回目の戦略でした。大きな方向として、保護区の充実も含めた保全の強化、傷ついた自然の再生、里山のような場所での持続可能な利用という3つを挙げて、重要な地域の保全といったものに加え、里山、湿地、傷ついた自然の再生と、より国土全体の自然の質を上げていきたいということを目指した提案を行いました。

第2次の戦略が平成14年にできて5年が経ってから、この1年をかけて第3次の戦略づくりをしてきました。この5年間、第2次の戦略を受けて、傷ついた自然の再生のための自然再生推進法や外来生物法ができ、新しい施策も動き始めました。また、人口がついには増加のピークに達し、減少に転じるということもありました。いろいろな施策は動いたのだけれど、今ご紹介した3つの危機は依然、歯止めがかかっていないという分析をいたしました。国際的にも大きな動きがありました。第2次の戦略ができた直後に2010年目標と呼んでいます。2010年までに地球全体の、あるいはそれぞれの国の生物多様性の悪化、損失のスピードに、顕著なブレーキをかけようという目標を合意しました。それに基づいて各国やってくるのですが、いくつもの地球全体の自然の状況を評価したレポートでは、例えば生物の種、生態系、外来種の状況など、いろいろな指標でまだ地球全体の悪化は止まっていない、進行している、2010年目標の達成は難しい、ということが課題となっています。それに

加えて、今年に入ってからIPCCの報告の中であったように、温暖化が生態系や生物種に与える影響が将来のことではなくて、既に現実のものとして起きている。温暖化の対策と生物多様性の対策というのは相互に関係し合っていて、それを連携して取り組まなければいけない、ということが国際的にも大きな課題になってきている。そんな国際的な動きも受けて、第3次の戦略づくりを進めてまいりました。

見直しをしてきた結果の新しいレッドリストでの種数では、多くの分類で2割以上、ものによっては3割以上の種が減少危機種として挙げられています。その原因として、生息地の破壊、捕獲や採取の影響、里山の環境の悪化、外来種の影響、などによって絶滅の危機はさらに進んでいるということが出てきています。レッドリストに挙げられた種は2,694から3,155まで増えました。情報が増えて新しくリストアップされた種もあれば、評価の対象が広がって新しくレッドリストに入ったというものもあります。環境が悪化したことによって新しくレッドリストに入ってきた種も沢山あるというのが現実です。沿岸の藻場に種を依存しているジュゴンも絶滅危機種に入りました。サンバヤゼニタナゴといった里地里山を指標するような生物も沢山レッドリストに入ってきたという現実もあります。

この100年の間、とりわけ戦後50年の間に、日本の自然環境は大きく悪化している、生態系が失われている、ということと言えると思います。干潟が戦後、4割ほど消滅してしまったということもあります。国土の2/3の森林というのは、世界でも非常に高い割合ではありますが、自然林まという国土の2割を切っている、湿地は明治・大正時代と比べれば、6割以上が失われている、ということがあります。世界の中で見ても、昭和30年代以降の生態系の悪化のスピードは、著しい急激なものだったのではないかと思います。そういったことに加えて地球温暖化の影響で、沢山の種の絶滅の危険が高まり、あるいは今年の夏も影響が出ましたがサンゴの白化など、温暖化の影響が深刻なものとして、逃れられない課題として出てきています。

もう1つ、忘れてはいけない点としては、私達の暮らしと世界の生物多様性の関係だと思います。食料は6割、木材は8割を海外の資源に依存しています。一方で世界を見渡せば、土地の劣化があり、森林の悪化があり、水産資源の減少といったものが深刻な問題となっています。そういうことからすれば、日本の中だけ良くなればいいのか、ということだと思います。やはり、世界の資源に依存している日本としては、地球全体で資源の持続可能な利用が実現することに私達は努力していかなければならない、そういう関係なのだと思います。

そんな現状認識を受けて、第3回目の戦略をつくりました。そのあらましについてです。私は小さいころ世田谷に住んでいました。幼稚園の頃に自分の家のすぐそばでオニヤンマを見つけて、それを目の前に見たときに心臓がバクバクしたことを今でもはっきりと覚えています。山奥だけではなくて、都市や町や村にも、生きものにぎわいを取り戻していきたいという思いで、3回目の戦略は「生きものにぎわいの国づくり」というサブタイトルをつけました。

その中で、横山さんの話の中にもありましたが、「生物多様性」という5つの漢字が、一般の人にわかりにくい、浸透していかない、という大きな課題があります。今回の戦略では、できるだけ私達の日常の暮らしとどうつながりがあるのかを伝えていければと、暮らしとつなげながら生物多様性がなぜ大事かということを知りやすく書くように試みたところです。

それから問題の分析というところで、3つの危機に加えて、地球温暖化による危機というのを新しく付け加えました。また、2つの点を今回の特徴として重視しました。1つは、100年先を見据えたということです。1つの森をつくるにしても100年くらいの時間がかかりますから、100年の間に壊れてきた日本の自然を、100年がかりで回復していければ、ということ計画しています。100年かけて国土全体の自然の質を高めていく。あるいはコンクリートで固めてしまうのではなくて、生態系の仕組みにうまく委ねながら国土の管理をしていく。そういった意味で生態系を基礎とした国土全体の再編を100年がかりでしていくのだ、という宣言を今回の戦略の中でしたということが、1つの特色かなと思います。国土全体を100年がかりで考えた時に、政府だけでできることは限られています。地方自治体や企業やNGOのみんなが立ち上がって、一緒に取り組むということが欠かせないということで、沢山のの人に参画してもらうための具体的提案を盛り込んだというのが、もう1つの特色かなと思っています。

これから5年、どんなことに力を入れていくかということで、4つの柱を挙げました。その第1に生物多様性を社会に浸透させるということを挙げました。3年ほど前に「生物多様性という言葉を知っていますか？聞いたことがありますか？」というアンケートを実施しました。その結果では、3割が知っている、聞いたことがあるという割合でした。これをまさに温暖化のように、みんなが知っている、そのために何かしたい、ということまでどうもっていくか、というのがとても大きな課題だと思います。この戦略では、民間の様々な人達に入ってもらって、100人規模のパートナーシップの場をつくり、そこでいろいろなアイデアを出して、社会に浸透させる取り組みをしていこうということを挙げました。企業の参画というのはとても大事になってきています。企業の人達と一緒にどんな生物多様性保全の活動ができるか、そういうガイドラインづくりも是非進めていきたいと思っています。学校教育や自然体験の中で生物多様性のことに取り組んでもらう、というのもとても大事なテーマになると思います。

2つ目には、奥山と都市の間の農林業地帯、広がりをもった中間地帯での、人と自然の関わりを里山や鳥獣保護被害の問題も含めて、もっと良いものに回復していくということを挙げています。

3つ目には、森から海にかけてのつながりをもっと太いものにしていく、ということも挙げました。今回の戦略では、海の生物多様性ということもとても大事なテーマで、そこを強化することも試みたところです。

4つ目に、地球規模の課題に対応した取り組みにも力を入れ

ていく必要があるということで、その中では、日本の自然共生のための智慧や技術を世界に発信していく、という提案をしているところです。

生物多様性条約は2年に1度、締約国会議をしています。2010年に第10回の節目の会議(COP10)があります。それに日本が開催地として立候補しています。2010年は生物多様性の減少にブレーキをかける目標の達成年でもありますし、国際生物多様性年にもなっています。それまでにどう生物多様性に向けた流れを大きくしていくが、とても大事だと思っています。

私は、数年前に釧路の事務所にいました。そこで関わった事例を1つだけご紹介します。知床が世界自然遺産になりました。流氷によってもたらされた植物プランクトンの大増殖が基点になって、膨大な命のつながりが見られる、海と陸の生態系が一体となって残っている、ということが評価されて遺産として認められました。登録の時にいろいろな宿題をもらいました。1つは、海の自然の質をもっと高める、生態系の保全を強化するための計画をつくりなさいというものです。知床は主要産業が漁業です。漁業が持続的にできることと、豊かな生態系の保全をどう両立させるか、そのための計画を漁業者の人にも入ってもらって進めているところです。

もう1つは、川についてです。森と海のつながりを果たす川についての改善ということで、14の川にある河川の工作物について1つ1つ点検して、シロザケやカラフトマスがもっとたくさん遡上できるように、改良できる場所を拾い出す作業をしています。できることからやろうということで、2mの高さの治山ダムを1mほど切り下げて、前後に岩を配置して魚が上れるように、森林管理局が工事を進めてくれています。こういった形で、海の生態系の質、森から川を通じて海につながるそのつながりを回復する、そういった意味でのチャレンジがされていますが、これを知床で留めずに知床を突破口にして、全国に広げていくということがとても大事な点だと思います。

さらにもう1つ、大事だなと思いましたが、こういった形で自然の質を高めていく努力をする中で、自然と関わりながら地域で暮らしている人がいます。自然だけが良くなるのではなくて、自然との関わりの中で地域に暮らしている人の生活や文化が、今よりも輝きを増していく、もっともっと豊かな地域づくりにつながる、そんなアプローチがとても大事なかなと考えています。

最後にスライドをご覧ください。釧路にいたときに取り組んだ、野生動物の1つの重要な対象であったシマフクロウです。生息環境である太い木の写真は、国後島です。魚が非常に濃密にいる川があって、室ができるような大木のある森が残っています。そこにシマフクロウも濃密に生息している。北海道の原風景のような、ゆったりと流れる川と巨木の森が残っていて、シマフクロウも残っているというような場所です。アイヌの人達がシマフクロウをコタンコルカムイと呼んでいました。村の守り神という意味になるそうです。つまり、北海道のあちこちに山奥だけでなく、それぞれの村を取り巻く森に村の守り神として、

シマフクロウが暮らしていた。そういった環境が失われて、今では北海道の中でポツンポツンとしか、生きながらえていない状況です。私は釧路で、是非シマフクロウをもっと身近に見られるように、もっと北海道のあちこちでシマフクロウが住めるような川や森を回復していくことができたなら、という思いを持ちながら仕事をしていました。

そういう意味で、それぞれの地域に暮らす人が、将来、地域の自然や生物多様性をどんな姿にもっていききたいのか、そういった将来像をみんなで描いて、みんなで共有して、その実現に向けて大きなうねりを起こしていくことがとても大事だなと思いました。全国からうねりを起こすと同時に、全国各地のそれ

ぞれのフィールドからもうねりを起こしていく、そういうことにつながればなというのが、第3回目の国家戦略で特に目指したいと思った点です。

たくさんの人が立ち上がることで、私は必ず流れを変えていくことができるのではないかと考えています。今回、清里ミーティングに集まった一人一人の皆さんがそれぞれの立場で、それぞれのフィールドで、こうしたうねりを高めていくことにご協力いただけたら、それは日本の生物多様性にとってとても大きな力になるのではないかと思います。そのことを私から皆さんにお願いして、私の発表を終わりたいと思います。

司会： 渡邊さん、どうもありがとうございました。また皆さんと個別にやりとりしていただければと思います。お聞きいただいたように、これは条約に関係する出来事ですね。地球全体で同じ様に困った状況が起きています。

それから、戦略という言葉が出てきました。国家戦略というものをそれぞれの国が持たなくてはいけないですね。日本の国家戦略というのは、日本人はどうする？という約束と方法なのですが、渡邊さんは日本人としてどうする？という国家戦略をとりまとめる責任者をされています。日本人は勘違いをしていて、環境省はどうする？という戦略をつくっているかのよ

うに思い違いをしています。そうじゃないです。日本人はどうする？という中味をつくらなければいけないわけで、私達は応援をしなければならないし、私達の問題でもあります。

そうやって応援をしようという大きな会社があって、(株)リコーの岸さんを紹介したいのですが、日本環境教育フォーラムの昔からの仲間です。会社の社会貢献、それから会社としてどういう生物多様性の保全ができるか、そういうことを一所懸命していらっしゃいます。国内だけでなく、中国やブラジルでも森林生態系保全プロジェクトが始まっていると伺っております。

企業が取り組む生物多様性保全

(株)リコー 社会環境本部 岸 和幸氏

今日、このようなお話をさせていただきますことを大変光栄に思っております。今の渡邊さんのお話を聴いておまして、穏やかな語り口が耳に心地よく、特に最後のお言葉が心に響いてきました。

私達リコーは、生物多様性保全、生態系保全ということをとっても大事にしております。やはり企業というものは、社会があってこそ、またその人間社会を支えてくれている地球環境、いろいろな生きものたちと環境とのやりとり、そこから生み出されている生態系があってこそだと認識しております。最近11月14日のニュースですが、企業と生物多様性保全が関係する記事が出ておりましたので、ご紹介いたします。生物多様性の第3次国家戦略で答申が出され、ここで企業の参画が求められているということでした。それから民主党が生物多様性保全基本法案の骨子案を出したとありました。これは企業の事業に対して、生物多様性保全に支障をきたす場合は見直しを行うようにという、国が強制権を持つようなもので、こういった基本法案が通ると、ほとんどの企業がこれはやらなくてはと、動き出していくようになると思います。非常に大きな動きかと思えます。

これまでの企業の環境保全について、簡単に取り組みの推移を

紹介します。日本企業の場合は、公害の対策から始まりました。その後いろいろな地球環境問題が明らかになっていく中で、局所的な公害対策はもちろんですが、グローバルな視点を持って行動していこうと、地球環境対策を行うようになってきています。

また、地球環境問題については、人間社会が自然に対して大きな影響を与えていて、その人間社会である今の社会構造が、大量生産・大量消費・大量廃棄の仕組みになっており、これを見直すかが問われています。その生産・消費・廃棄を担っているのが私達企業で、これは非常に問題だと、どの企業でも認識してきていると思います。

企業の環境の取り組みは、環境対応、環境保全、環境経営という形でだんだんとスパイラルアップしてきています。対応というのは、法規制、他社の戦略、社会の声があって、そのうえで



が何をやるかという後追いの仕事なのですが、後追いですとコストもかかります。置き換えるということで会社の戦略として、自分達が先駆的に何をやるべきかを考え、ただしコストがかかっているのは企業が成り立ちませんので、保全を進めながら一方できちっと利益を出す、といった環境経営に取り組むようになってきております。

2004年頃がCSR元年と言われていますが、企業の社会的責任、これが非常に大きな経営のテーマになってきています。その中で個々の企業がどんなテーマにどう取り組むか、殊に生物多様性保全が企業の戦略の中で非常に重要である、という認識が多くの企業に段々と広がり始めています。私が所属している社会環境本部はスタッフが70名ほどおりますが、ほとんどの人間が環境負荷の削減活動に取り組んでおります。私は他の2名との計3名で生態系・生物多様性に取り組んでおります。環境に携わる人間であっても、ほとんどの社会環境本部の人間が、生態系の重要性、生物多様性を説明しろということになると、やはり難しいと言います。本部内の方針発表会があった時に、簡単に地球の生態系と人間社会の関係を表した図を見せましたところ、本部員達が結構スッキリしてくれたと聞いております。言ってみれば、人間社会が成り立っているというのは、地球環境の生態系から大量に資源を得て、その中から経済活動が行われ、最終的に出された廃棄物を誰が処理してくれているか、となると生態系です。ただし、生態系といっても単調なものではなく、非常に大事なものは生物多様性です。生態系の中に様々な生きもの達がいろいろな関係をおこなっている、その多様性が高ければ高いほど、資源が受けられる、廃棄物を処理してもらえる、といった恩恵を人間社会が受けられるということです。私の環境保全の先生の一人がC.W.ニコルさんなのですが、ニコルさんがいつも言われているのは、「多様性は可能性」という言葉です。非常にわかりやすい言葉だと思いますが、大事なキーワードとして私はいつも思っています。

生物多様性から人間社会は様々なサービスを受けています。気候の調整や水源の涵養などいろいろありますが、特に企業の場合には、生態系サービスから非常に高い恩恵を受けております。アメリカの学者が、個々の生態系サービスに対してこれを金額換算するといくらになるのか、という計算を出したものがあります。それを企業関係の方たちに見せると、今まで下を向いていたのが急にメモをし始めるなどということがあります。やはり企業に関係する方というのは定量評価というか、数値的なもの、特にお金に換算したものが大好きですね。私の企業の中でも、経営企画に携わる人間というのは、生態系一般の話をして目をつぶっていますが、生態系のお金がいくらですという急に目を覚ますようなことがあります。1997年の計算だそうですが、海、森林、川・湖沼、農地といった生態系から出されているサービス、これを仮に自然界からではなく人間が自ら作り出すとしたら、約3,600兆円かかると計算されています。因みに企業は、こういった生態系サービスを無償で受けていて、これは企業会計には一切入っておりません。本当においしいものをいただいているのだと思います。

ところがこの大事な生態系サービスに対して、自分達で自分達の首を絞めている状態になっています。1つに人口増加という原因がありますが、一方で豊かさを追い求めての経済成長によって、食料・資源などの需要がどんどん拡大しております。私は先日、中国に行つてまいりましたが、非常な経済発展ぶりに本当に驚きました。中国が爆食と呼ばれていて、資源の大量消費をしております。インドもそうですが、先進国に追いつけ追い越せで、彼らの考えているところでは、自分達も先進国のように豊かさを味わいたいのだと、中国の農村レベルでは豊かさというものを本当に追い求めています。けれども、日本人が気づいているように、今まで求めてきた豊かさの仕組みというものが、その結果どうなっているか、生態系サービスも劣化しています。これは国際的に本当にきちっと取り組んでいかないといけない問題だなと、関係者の方達と話してきました。

2000年度に環境省からいただいた、日本の主要資源をどれくらい輸入に依存しているかという資料では、再生産可能な資源である木材が52%、穀物が72%です。枯渇資源と呼ばれる鉱物系の資源である石油や天然ガスなどは、ほぼ100%に近いですが、エコロジカルフットプリント(どれほど人間が自然環境に依存しているかをわかりやすく伝える指標)というものがあるのですが、これを計算した方がいて、日本はもし海外から資源を輸入できなくなってしまった場合、自前の資源でどれだけ生活できるかという、1月1日から生活し始めて、自前の資源がなくなるのが3月13日頃とおっしゃっていました。3月14日以降というのは資源がなくなってしまう、つまり生活ができないという非常に恐ろしい現状ですが、これは日本に限らず他の先進国でも同様だそうです。

企業は原材料調達で資源を大量に輸入していますが、例えば食料関連で見たときに、生物多様性に及ぼしている影響というものを考えてみました。採集過程や栽培過程というところでのいろいろな影響があります。生きものの生息域を開発によって劣化させてしまうと、災害のときの大量生産をねらってクローン作物や遺伝子組換え作物を入れてしまい、それによってもともと固有の生物種に影響を与えてしまうとか、魚の大量捕獲、農薬の化学肥料の使用による汚染など、もろもろの企業の活動が生物多様性の喪失に関与してしまっています。さらに人間社会が人口増加、経済成長と、地球環境問題にいろいろな悪影響を与えてしまっていて、結果的に人類存続の危機を招く生態系の破壊に加え、自分達の人体への健康被害という形で、首を絞めているという状況にあります。そのような中で、企業の社会的責任という言葉が非常に大きくなってきています。責任というところでは、企業が生物多様性の保全にどう取り組んでいくのか。取り組みが失敗する場合には、今後のブランドイメージが悪化していくとか、金融市場で低い格付けになるといった、企業の存続が成り立たない状況となります。これが企業経営において、生物多様性の保全を大事にしていかなければならない大きな理由の一つになっているかと思えます。

個別の企業でも今まで高い社会貢献活動を行っているところとはたくさんありました。ただし、これからは社会貢献の

部分だけで生物多様性保全を成り立たせるというのではなく、やはり個々の業種の企業が、本業の中で生物多様性保全に影響を与えていないかの配慮を行っていくこと、これが私達は非常に大事だと思っています。企業の中の保全のガイドラインや、サプライチェーンでの配慮で調達基準や認証制度などをきちっと守る、あるいは開発に伴って劣化させた分を他のところで多様性の保全に充てるなど、そういったことにきちっと取り組む必要があると考えております。

特に今年は日本国内の企業での生物多様性元年かなと関係者と話すことが多いのですが、今年に入って企業の方たちから生物多様性というキーワードが随分出てくるようになりました。ガイドラインの制定では鹿島建設さん、天然資源採取時の配慮では住友金属鉱山さん、中国・韓国・日本にまたがる黄海での海洋の多様性保全プロジェクトの発表があった松下電器さんなど、企業の中で小さなうねりから大きなうねりになりつつあるのかなと、私は感じております。

私達のリコーグループの紹介をさせていただきますと、企業の本業として環境負荷をいかに削減していくかということと、劣化してしまった生態系を回復させないと企業そのものが成り立ちませんので、生態系の力をいかにアップさせるかということで、生物多様性の保全に取り組んでおります。多様性の保全では、社会貢献で世界各地の自然生態系を保全したり、社員一人一人が森林保全を行うボランティアを実践したり、京都議定書のメカニズムの CDM(クリーン開発メカニズム)を行ったりしています。私達は企業なのですが、企業本体が行えることのみならず、企業は人で成り立っていますから、企業に所属している社員がきちっと自分の中に意識を持ち、身近な自然に目を向け、できることから取り組んでいくことも必要と考えます。

社員も個々に取り組まなければいけないと、社員の自主活動の推進も広げております。また、輪を広げることも必要で、社会に対しての啓発活動などをいろいろ行っています。それから、生物多様性ホットスポットと言って、非常に生物多様性が高いにも関わらず、今のまま放置しておく破壊されてしまうという場所の、保全プロジェクトにも取り組んでいます。ただし、これを全部私達の資金ではできません。ここにいらしている方で自分達も取り組んでみようという企業関係の方がいらしたら、是非、連携してやっていきましょう。

最後になりますが、私達リコーグループが生物多様性の保全に、他の企業よりは少し早く取り組んできたということが評価されまして、いろいろな場でこのようなお話をさせていただくことや取材を受けることが今年増えてきました。いつもそのような場で言っているのですが、いくら私達リコーが保全が大事とって取り組んだところで、たかだか一企業の生態系保全の効果というのは知れております。小さいものです。大事なことはやはり、同じ志を持った多くの組織で、他の企業も、NPO、行政といったいろいろなネットワーク、連携というものが網状になって、その中で生物多様性保全に取り組む、大きなベクトルで動いていく、それが大切です。そのために地球環境月間シンポジウムというものを昨年から開いております。これは企業の方たちが主体で、企業の方たちにこういったことの大切さを伝えるようにしています。今、企業がいくつか集まり始めて、企業の連携で生物多様性保全を図るというネットワークをつかっていこうという動きがあります。この場には NPO 関係の方が特に多いと思いますが、是非、企業、行政と一緒に保全に取り組んでいきましょう。やはり皆さんの意識と行動が大事だと願っております。

司会：岸さん、どうもありがとうございました。うまくまとめていただいて、大変勉強になったと思います。進んだ会社ですごいですね。会社が今、生物多様性について取り組まれています、会社ってシステムなので、生物多様性が充分確保されないと、システムが成り立たないということをいち早く気づかれた方々なのだと思います。この全体会で今回のキーワードである「生物多様性」のさわりの部分をお話いただきましたが、明日の午前と午後に生物多様性に関する分科会を用意しています。もっと詳しく知りたい、あるいは今お話いただい

ようなことをどうやって人に伝えていくか、わかり合うか、というような戦術を明日の分科会でやりたいと思っています。私も日本自然保護協会という NGO 組織において、生物多様性を守る専門の組織でありたいと思っています。皆さんも NPO や民間の自由な活動をしている仲間達なわけですが、私達が次にどうするかということをお考え合って作り出していきたいと、明日の分科会はそのように考えております。

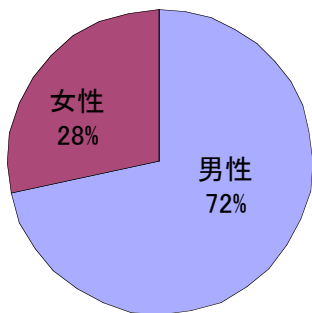
最後にもう一度、渡邊さんと岸さんに応援の拍手をお願いいたします。



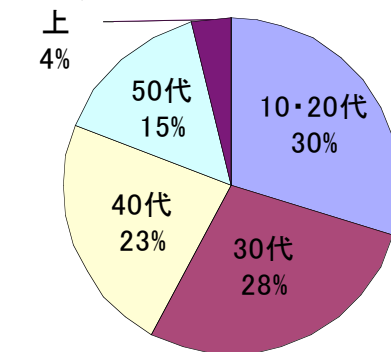
参加者データ

～データに見る清里ミーティング 2007～

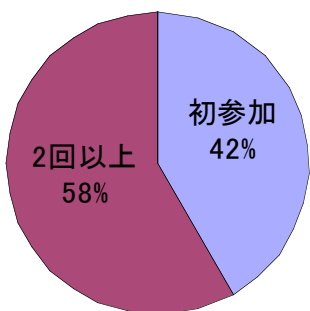
性別



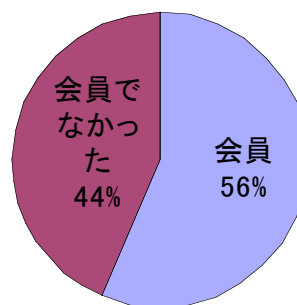
年齢



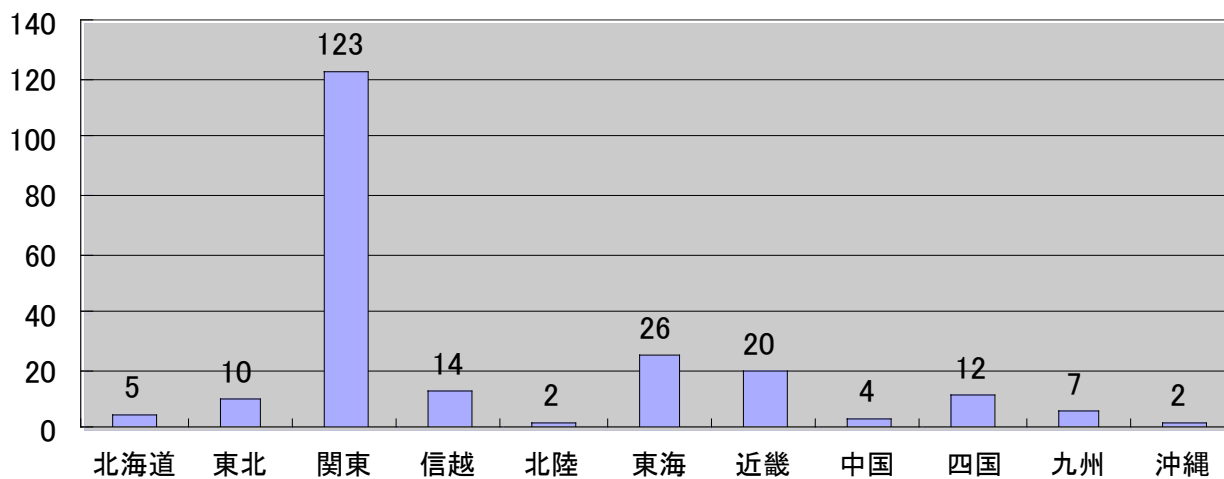
参加回数



JEEF会員比率



地域



2 日目

ワークショップ

【午前の部】

1. 「生物多様性」のを見つけ方・伝え方 ※
～自然体験活動を生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法～
2. 行政との協働を考える ※
3. 学ぶ環境としてのコミュニケーション ～GEMS とゴードンメソッド～
4. 食育コミュニティをつくろう！
5. どこでもインタープリテーション！ ～グッズ展開型 I P～
6. 関西発！これからは日本的でいこう！！
7. 新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム スピード・ソリューション～自然学校版～
8. 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
9. ツリークライミング®樹上の世界から学ぶこと
10. 50分プレゼンテーション

【午後の部】

11. 企業と環境 NPO との協働を進める戦略会議 ※
12. ESD を広める人のための「ESD 入門講座」 ※
13. 環境教育基礎講座 ※
14. 生物多様性と環境教育について ※
15. 科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ ※
16. メディアと自然学校
17. 環境経営戦略ゲーム体験会
18. 体験型展示物を評価しよう
19. エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ！
20. 障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
21. やってみよう!! 体感 ツリークライミング®の世界

※は、主催者企画ワークショップ

「生物多様性」のを見つけ方・伝え方

～自然体験活動を生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法～

実施者：横山隆一・芝小路晴子(財団法人日本自然保護協会)

北野日出男(社団法人日本環境教育フォーラム会長)

中村康弘(NPO 法人日本チョウ類保全協会)



温暖化による気候変動と地域の生物多様性保全。この緊急性・重要性・関係性の理解を広めることは、自然保護と環境教育の二大テーマである。ところが、実際の自然の中で、これらが私たちの足元に現実に関わり、私たちが改善の主体になれるものであることを確かに伝える方法は、意外に広まっていない。そこで、生き物を発見したり識別する知識や経験が少ないなどという人に、これならできそう・使えそう・やってみたいと思ってもらえるようにするにはどうしたらよいか、自然体験活動を生物多様性保全の教育活動に結びつける方法を探った。

横山隆一 (JEEF 理事・(財)日本自然保護協会) が進行し、北野日出男 (JEEF 会長)、中村康弘 (NPO 法人日本チョウ類保全協会)、芝小路晴子 ((財)日本自然保護協会) の3人のパネラーから、生物多様性とはどういうものか、チョウから生物多様性の存在と広がりを感じる方法、生物多様性に気づく機会や方法を広めるための活動事例(「NACS-J 全国・自然しらべ」企画)とその工夫点について紹介を行った。

レクチャー後のディスカッションでは、里やま自然における保全目標づくりのあり方や、多様性の見つけ方を身につける方法、自然観察のほかにも生物多様性が感じとれるもの(食材、色の名前、俳句の季語)などについて意見交換が行われた。

生物多様性は、なかなかひと言では言い表しにくく、毎日の暮らしと結びつけづらいテーマではあるが、食べ物のレパートリーひとつとっても、私たちは確実に自然の恵みと多様性に支えられて生きている。一人ひとりが、日常生活の中で生物多様性を感じとった行動を選択できるセンスを身につけ、磨いていく必要がある。

行政との協働を考える

実施者：佐藤初雄 (NPO 法人国際自然大学校)

太田原康志 (NPO 法人自然体験活動推進協議会)



単に「行政との協働」と聞くと、行政がNPOや民間団体に事業を委託する、資金を補助する、職員を派遣する、などの一方通行的なものを想像してしまう。また、行政とNPOが共に事業の企画・運営をするといった場合においても、協働していると言いつつも、どうしても行政が主導もしくは管理する傾向が見受けられる。これは本当に「協働している」と言えるのだろうか。

こういったNPO側の戸惑いや言い分、行政側の思い、具体的な協働のあり方などを、実際に行政担当者を交えて穏やかに本音で語りあえる場があってもいいのではないかと、という思いからこのワークショップが始まった。今年度のワークショップでは、下記の5省庁と約30人の参加者が集まった。

【参加省庁】

文部科学省	スポーツ・青少年局青少年課
農林水産省	農村振興局企画部農村政策課都市農業・地域交流室
林野庁	計画課森林総合利用・山村振興室
環境省	総合環境政策局環境経済課環境教育推進室&民間活動支援室
国土交通省	港湾局国際・環境課
国土交通省	河川局河川環境課

行政と何かをするという話になると、対立的な構図になってしまい、お互いに相手に要求することが多くなりがちだが、NPOや民間団体が配慮すべき点がある。

(1) 広い視野をもつ

国が行う施策は常に日本全体を視野に置いており、地方自治体はそれぞれの地域全体を視野に置いて事業を展開している。行政がNPOなどと協働する場合も例外ではなく、自分の団体のことだけ、もしくは、一部の限られた人や地域のことだけを考えるのではなく、広い視野をもちつつ協働のあり方を模索していく必要がある。

(2) 相手に伝わる文書力

物事を進めていくためには行政内では多くの人たちの意志決定が必要になってくる。その際、NPOや民間団体の思いがいくら強くても、その思いは行政の中では伝わっていかない。行政に提出する文書は、具体的でわかりやすく、読み手に十分伝わるものを心がける必要がある。

全体を通して感じたことだが、行政との協働を考える場合には、まだまだ「お互いの役割を知る」「それぞれの組織の特性や仕組みを知る」「相手が話す言葉の意味を理解する」「お互いの情報を共有する」などといった最も初めの一步からスタートする必要があるように思われる。このワークショップではそれらのすべてとは言わないが、限られた時間の中でその一部でも知ることができたのではないかと思う。

学ぶ環境としてのコミュニケーション

～GEMS とゴードンメソッド～

実施者：高木幹夫・河野忠一・武石泉・川瀬雅子・柴原みどりマリアンヌ

(NPO 法人体験学習研究会)



【はじめに】

参加者の学びや気づきが生まれやすい環境のために、私達は「コミュニケーション」を大切にしています。それは、実施者と参加者とのコミュニケーションだったり、参加者どうしでのコミュニケーションだったりします。今回のワークショップでは、実施者と参加者のコミュニケーションに焦点を当て、効果的なコミュニケーションの方法について、ゴードン・メソッドのエッセンスをGEMS（科学と数学の体験学習）のプログラム体験の中で伝えることをねらいとして、実施しました。

【実施内容】

(1) GEMS「文化遺産調査①／散策へ go！」

「自然の中のものを持ちに行くよ！」このことから、プログラムが始まりました。参加者は、一人一人小さな紙袋を手にもって、外に出かけていきました。そして散策から帰ってきて、机に新聞紙を敷き、拾ってきたものを広げてみると、枯葉や木の枝、実、糞など、さまざまなものが出てきました。

(2) GEMS「文化遺産調査②／秘密の分類ゲーム」

次に、拾ってきたものをグループごとに分類しました。あるグループは、緑、茶色…と色に注目して分類をしていました。また別のグループでは、分解者、エネルギーをつくりだすもの…と分類していました。分類した後は、秘密の分類ゲームです。他のグループの分類を見に行って、どのような視点で分類したのかを推理し、当てっこしました。

(3) ゴードンメソッドの紹介

分類ゲームが終わった時点で、実施者が、どのようなことに意識しながら、ここまで話をしてきたのかということ伝えました。それは「わたし」を主語にして、自分の気持ちや考えている事をありのままに伝える「わたしメッセージ」と言うものでした。これは、ゴードン・メソッドと言われているコミュニケーション技法の1つです。参加者からは、ゴードン・メソッドについて興味を持ちました、というコメントをいただきました。

(4) GEMS「文化遺産調査③／お面をつくろう！」

散策で集めたものと工作用紙を使って、お面を作りました。まずは、ネイティブアメリカンの豊穡を祈るためのお面などを見て、お面へのイメージを広げ、それから自分の生活に必要なお面を作りました。木の枝を角にしたり、木の実を目にしたり、松葉を眉毛にしたりと、みなさん個性豊かなお面を作っていました。

【最後に】

参加した皆さんのコメントから、私たちも多くを学んだワークショップでした。

ありがとうございました。

食育コミュニティをつくらう！

実施者：西村和代(環境共育事務所カラーズ)

西村仁志(同志社大学大学院総合政策科学研究科)



環境教育のなかでも「食」は欠かすことのできない大切なテーマだと実施者らは考えている。私たち人間は毎日必ず何かを飲んだり食べたりしており、それらの食料は必ず大地や大海原のうえでとれ、つくられ、さまざまな人の手やエネルギーを使って、お皿の上までやってくる。お皿の上のものを考えることは地球や大地、いのちや農のことを考えることにつながるのだ。

実施者らは2年間に渡り、同志社大学大学院の学外実験施設において「食育ファーム in 大原」という実践研究プロジェクトに取り組んできた。小学生の子どもたちとご家族が、春の畑づくり、草引きや施肥などの世話、夏野菜の収穫、冬野菜の植え付け、収穫、お料理をし、さらに自分達でまる1日運営する「こどもレストラン」でお客様をもてなすという一連のプログラムである。この実践からは子どもたちと保護者の食と農への関心の深まりだけではなく、「共に同じものを食べる」という行為を通じて、ひとつのコミュニティを形成してきた。この実践からは国や自治体が主導して行ってきた「食育」とは別の可能性を拓いていけるような予感をもっている。



さて、このワークショップでは、この「食育ファーム in 大原」の取り組みについて紹介するとともに、「食」や「食育」に関心をもって集った13名の参加者と実施者が一緒に、これからの食育のあり方について考え、出会いの場としたいと思い設定した。

参加者各自の問題意識をもとに3つのグループに分かれて「こんな食育活動が出来るといいな」というアイデアを出すなかで、山梨で自立・自給生活の実践をおこなっている加藤大吾さんの畑の大根を手作り味噌でいただきながら「自給」をキーワードにした実践のアイデアや、金沢大学の中村浩二さんが能登半島里山里海自然学校で行っておられる「里山マイスター」に触発された「奥能登のエコツアー」と連動した食育など、非常に多様で豊かな食育のアイデアが出されていた。また「ぜひ機会をつくって訪ねたい」という声もあちこちで聞かれたことから、参加されたみなさんの今後につながる有意義なワークショップとなり、何よりもこのワークショップを設定した私たちの収穫がいちばん大きかったのではと感じている。

どこでもインタープリテーション！

～グッズ展開型 I P～

実施者：村松亜希子・小林友美・小河原孝生（株式会社生態計画研究所）



【はじめに】

企業や行政との協働など、様々な分野で実施の機会をいただくようになりました。新しい世界との出逢いは、魅力もいっぱいですが、制約が多いのも実状です。「室内限定・内容変更禁止・シナリオ事前提出」等が経験した制約の一例です。でも、「やるからには質の高いプログラムを実施したい！」そんなとき「インタープリテーション（I P）をピンポイントで補佐する小道具」ではなく、「ストーリーがあり、グッズ自体がメインとなる＝グッズ展開型 I P」があれば、他分野の方にも事前に内容や雰囲気伝えることができ、応用も可能です。その例を体験し、みなさんとその可能性について考えたいと思い、実施しました。

【実施内容】

- 9:00 ●このWSの説明
●グッズを使って自己紹介
- 9:40 ●体験！グッズ展開型 I P
（ ）内は使用した主なグッズ
1. 生きものマップ
～きみの街に住んでる生きものは？
(ボード、環境・生きものパズル、ハビタットカード、フィールドサイン)

2. 生きものからのSOSをキャッチせよ！
(お面、生息環境トレイ、隠れ場所・食べ物・水ピース、答え合せカード)

10:30 ●休憩&質問タイム

3. ベニザケに挑戦！
～君は匂いで故郷に戻れるか？
(川MAP、匂い4種、脱脂綿、フィルムケース)
4. カエルに挑戦！
～なが～い舌で生き残れ
(お面、葉っぱ、シール、吹き戻し、虫カード)

5. バイオミミクリ
～生きものに学ぶ私たちの生活
(スケッチブック)

11:25 ●ふりかえり+みんなで考えるグッズ展開型 I P

12:00 終了

【参加者の感想から】

- ・安価ですぐに使え、ねらいと行為が直接つながるプログラムであることが良い。
- ・野外の本物にこそメッセージがあるが、天候に左右されないPGの重要性も認識していた。開発の意欲がでた。
- ・身近なものでも知恵を使って工夫すればできることはたくさんあるとわかった。

【まとめ】

今回は紹介した事例の話で終わってしまい、グッズ展開型 I P 全体の可能性、課題まで進めることができませんでしたが、こういった I P の必要性については、みなさんと共有できたと思います。こういった I P で、一度他分野の方と信頼関係ができれば、その後は制約が減り、グッとやりやすくなることも実感しています。また、観察ではなかなか見えてこない生きものの生活を、シミュレーションから学ぶ大切さも感じています。今後はその可能性と課題まで、みなさんと考えていきたいです。

関西発！これからは日本的でいこう！！

実施者：新田章伸・田島由起子(日本の自然観実践研究会)

田中利男(日本型環境共育推進協議会)

【ねらい】

環境教育を生き方、暮らし方に結びつく段階まで深めて行くために、私たちが生まれ住む日本の自然、文化、価値観に根ざした自然観を再認識する必要があるというメッセージを伝え、共に考える。ここから未来へ。

【内容】

ワーク1「私が大切にしている日本的なコト、モノ。そのころは？」

事例紹介

- ・日本型環境共育推進協議会、関連の活動
- ・日本の自然観実践研究会、里山キッズクラブの活動

ワーク2「これまでの活動にあった日本的をさがし、捉えなおす」

まとめ 「感想・私のこれからの取組み」

【配布資料】

「日本の自然観の現代的意義」(序説)
京都ノートルダム女子大学 菅井啓之

地球環境問題を契機に科学的自然観一辺倒では行き詰まりを呈し始めた現代、私たちはどこにその打開策を見出せばよいのであろうか。人間中心主義からの脱却や自然に対する人間の責任を果たすには環境倫理の確立と自然観の転換とが求められる。あらゆる生命との共生を前提とした健全なる環境観、バランスのとれた自然観が構築されてこそ地球環境も回復の方向に進むことができるのである。

人間中心主義から生命中心主義への転換は、人と自然を峻別する科学的自然観に対し、自然と一体化してきた日本の自然観を再認識しその現代的意義を問い直すことから始まると考える。図説「日本の自然観

日本人の調和的な生き方の理想とされる「自然体」という生き方は、一つの自然思想であり自然を対象化することなく自然の中に溶け込んで自然と一つになって生きる生き方である。利便性や効率、経済性などの快適さ豊かさのみを優先するのではなく、自然と共に生きることを最高の生き方としてきた日本人の自然の見方を環境教育をはじめとして現代に生かす道を考察し、現代的意義を問い直してみたい。「自然・自己・自由」を考えるキーワードが「自」(おのずから・みずから)であり、日本人の生き方のエッセンスでもある。ここに地球環境問題解決のための基盤となる環境倫理や環境哲学のみならず、個人の充実した人生の生き方に対しても何か重要なものが潜んでいるように思われる。



■ 図2 ■ 「日本の自然観の心的側面」 菅井啓之(京都ノートルダム女子大学) 2007/7

図説「日本の自然観の心的側面」

新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム

スピード・ソリューション～自然学校版～

実施者：齊藤 透(教育ゲーム開発集団GARDEN)

とても簡単にそして楽しく、日常業務の「？」に実践的ですがすぐに使える解決策と、そこに至る思考プロセスを交換し合える”ゲーム形式のスタッフ研修メソッド”です。

【優れた特徴】

- ①簡単・・・日頃の具体的な課題を持ち寄るだけ。事前準備の負荷がほとんどありません。
- ②楽しい・・・発言を遮られずに、驚くほど真剣に自分の意見を聞いてもらえます。これがこのゲームのミソ！
- ③効果抜群・・・同じ悩みを持つ仲間の経験に基づく知恵(優れたノウハウや思考プロセスの交換)なので、実践的ですがすぐに使えるものを必ずお持ち帰りいただけます。

【当日、その場で出していたいただいた課題の一例】

- 大人向けのワークショップで、はじめにアイスブレイクゲームを行っていたら、ゲームの途中で「私らは遊びに来たんやない。真剣な話をしに来たんや！」と怒鳴られてしまった・・・さあ、どうする？
- ・本当にあった話みたいで即、議論百出。皆さん鬼気迫る迫力で真剣なやりとり。
- ・経験値に差があっても全くOKなのがこのプログラムのいいところ。若手は若手なりに一生懸命考えた

意見が、ベテランからは百戦錬磨の技が繰り出され歓声をあげてうなずき合っていました。

- ・「柔軟な対応も腕だけどね、毅然とした姿勢も必要だよ。なぜならばね・・・」「うーん、なるほど。」といった具合。
- ・対応マニュアルではないので、答えは一つではありません。大切なのは、そこに至るまでの”考え方 = 思考プロセス”です。

これは、短時間で数多くのケーススタディに取り組むことができ、ふだんは聞くことができない仲間同士の様々なノウハウ・思考プロセスを交換することができる、今までにないプログラムです。

ビジネス研修用に開発されたこのプログラムは、「(1)皆さんの組織内のスタッフ育成に活用できる」ことはもちろんですが、体験型でファシリテーションが重要なプログラム提供を得意とされる皆さんには、「(2) (環境教育以外の)他組織への提供もできるもの」ともいえましょう。著作権を所有する(有)エデュテイメント・プラネット社では、(1)にはCSRの見地から柔軟に対応し、(2)はパートナーとして協働していきたいと考えているとのことですので、(1)(2)ともに実施の際にはお気軽にご相談ください。

教育ゲーム開発集団 GARDE

どんなものでもゲームにします

ゲームを「参加体験型のプログラム」と捉え、開発・普及を行っている集団です。どんなものでもゲームにできますので、お気軽にご相談ください。

ゲームを用いた教育プログラムの長所

- ① 楽しく学べる、②とっつきやすい(敬遠されにくい)、③参加型だから能動的に関わる、④参加者間に深いコミュニケーション、⑤体験型だから印象に残る、⑥焦点を絞り込むのでメッセージを伝えやすい、⑦体験型なのに場所や天候を選ばない、⑧プログラムそのものの完成度が高く、施行者のレベルの差は出にくい、⑨体験型でファシリテーションが重要という点で、フィールド系でご活躍の方との相性も抜群

清里ミーティングでの実績

- ・2003年：「ケミカル 環境版」(投資意思決定ゲーム) ・2004年：「エコ六」(JEEFと共同開発した双六形式で環境社会を考えるゲーム)
 - ・2005年：「eCO2 FUNd! (エコエコファンD)」 ・2006年、2007年：「スピード・ソリューション 自然学校版」
- (この他、JEEFの「環境経営戦略ゲーム」の開発にも携わりました。)

企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える

実施者：鶴ヶ谷優子(社団法人日本環境教育フォーラム)



JEEF とコスモ石油との協働プロジェクト「コスモ石油エコカード基金 学校の環境教育支援プロジェクト」では、学校の総合学習の時間等で環境教育プログラムを取り入れるための支援活動を、企業、NPO、学校の三者連携で行っています。今年度プロジェクトを実施している 9ヶ所の学校の先生、NPO スタッフが一同に集い、各地の活動報告、交流を兼ねて、学校に環境教育プログラムを取り入れる意義、三者連携プロジェクトのメリットデメリット、改善点等について語り合いました。また、プロジェクト関係者以外にも、学校での環境教育の取り組みに興味を持つ学生、学校の先生、企業、NPOなど多くの方が参加し、「企業、NPO、学校の連携による環境教育」の可能性について議論しました。

各地の事例紹介を行った後、フリーディスカッションで、当プロジェクトに対する思い、改善策などを話し合いました。

■フリーディスカッションで交わされた意見(抜粋)

Q. 本プロジェクトは実施後もノウハウを学んだ学校が環境教育を継続していくことを目的としているが、「継続」するためのポイントとは？

<学校>

- ・フィールドへの移動に時間がかかること、先生の転任があり、地域の自然やフィールドを把握しきれな

いこと、管理職の交代による学校の方針の変化など、継続への課題がある。

<NPO>

- ・先生方は多忙なので、自分達だけでやれるような余裕は少ない。プロジェクトが終わってからも外からのヘルプが必要である。
- ・学校中心でプロジェクトを実施するとどうしても一年単位になってしまうので、地域やNPOにノウハウがたまるようにして、その学区で支えていけばよいのではないかと。

Q. 企業がこのようなプロジェクトを行う意義とは？

<企業>

- ・純粋な社会貢献のためにやっており、PR効果を期待していない。むしろ、このような活動に見返りを求めると、売名行為と捉えられる可能性もある。
- ・決定権のある役員を現場に連れて行くと理解が深まる。

プロジェクトの参加者が一同に集まることで、お互いの取り組みを知ったり、交流できる場となった他、NPO や学校の先生、また、ワークショップに参加してくださった方々から貴重なご意見をいただくことができました。

今回いただいた意見を取り入れ、さらに良きプロジェクトとなるよう、努力していきます。

ツリークライミング® 樹上の世界から学ぶこと

実施者：ジョン・ギヤスライト・川尻秀樹・安藤義樹(ツリークライミング®ジャパン)

協力：TCJ(ツリークライミング®ジャパン)スタッフ

上田康美、加藤安雄、下司高明、原孝昭、飯塚正明、渡邊昇、渡邊剛俊



日本に紹介されてようやく 10 年が経過したツリークライミング®は木や森に親しむためのレクリエーションアクティビティとして全国に広がりを見せ、ライセンスリーダーによる体験イベントも着実に増えてきた。しかしながら、安全に対する理解や木に登るといふ行為そのものについての誤解や短絡的な理解も少なからずあり、森林環境教育としての位置づけもいまだ定着しているとは言いがたい。ワークショップでは「たかが木登り、されど木登り」の気づきをめざし、日本人の常識としてのいわゆる「木登り」と「ツリークライミング®」とが、いかに異なるものなのか正確な認識を共有しつつ、参加者とともに国内におけるツリークライミング®の将来展望についても検証を試みた。

ワークショップ前半ではツリークライミング®国内ファウンダーであるジョン・ギヤスライトがツリークライミング®を日本に紹介するきっかけとなった女性フィジカルチャレンジャー(TCJ では身体に障害ある体験者をこう呼んでいる)との出会いやその後の取り組み、名古屋大学大学院でツリーセラピー®をテーマとした世界初の最新研究について解説し、参加者に共

通認識を深めてもらった。それに引き続き TCJ 副代表川尻秀樹が国内での実践組織、国際的組織との関係やライセンス制度について説明し、参加者とともに体験イベントの実施の流れや安全管理、ギア(用具)の特殊性など技術面の情報とともに、木に感謝し、木を取り巻く沢山の生命の営みに敬意を払う心を大切にする活動であること、地球環境に貯金をしようという壮大な捉え方など「木と友達になろう」というメッセージの持つ意味についてあらためて考察を試みた。

後半では、ツリークライミング®の経験や理解の度合いに応じ、2 つのグループに分かれて将来展望や今後の課題についてのディスカッションを行った。

ワークショップ参加者は、実経験のある方からまったく経験の無い方までさまざまであったが、単なる木登りにとどまらないツリークライミング®の世界の可能性についてその奥深さに驚いたとの感想が複数寄せられた。

50分プレゼンテーション

A. 検証：自然再生の現場から～ナベヅルは帰ってくるか～

実施者：徳永豊（スリーヒルズ・アソシエーション）

平成19年3月3日山口県周南市八代から発信機を付けた3羽のナベヅルが、野に放たれました。遠く440km離れた場所に連れてこられたナベヅルは、果たしてどういう行動を取ったのか、またこの事業に将来の見通しはあるのか、参加者の皆さんと本音でトークしませんか。

山口県周南市八代で、ツル担当をしている徳永が、現場での事例報告をしました。鹿児島県出水市に渡来するツルは、ここ数年万羽ツルを数えます。一方八代では昭和15年の355羽をピークにして昨年は9羽の渡来鶴で終わりました。危機的な状況を打破するために、出水市で保護されたナベヅルを移送する計画が平成18年から始まりました。

周南市では、初年度18年2月25日に3羽を移送し、1年程度飼育し、3月3日に放鳥しました。その経緯を説明しました。結局、報告に終わりましたが、なぜこの事業を実施する必要があるのかを多くの人に理解してもらう必要があると考え、毎年継続しています。まずは、熱心に聞いていただいただけでもよかったと思います。



B. ポジティブエコロジー

実施者：田嶋リサ（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科）

英語学習における「知っているはずなのに、使えない」というジレンマと、環境学習における「環境問題に関する知識はあるのに、行動が伴わない」という現実を比較。「趣味」という身近なテーマから環境配慮行動を喚起する可能性を探った。「観察」⇔「気付き」⇔「知識」⇔「理解」⇔「行動」というモデルを提示し、環境問題解決に対する世代間ギャップへの配慮なども討論。



C. 人が生活を変えたくなる動機付けは、あるか！？

実施者：桃井奉彦（木水土里研究所）

参加者は多彩な8名。自己紹介の後、資料で要点を説明し、議論するという進行だった。要点は、

- ①環境問題の本当の原因は、私たちの文明の中の「自然のメカニズムを壊している部分だ」とわかってきた。それには、私たち自身も含めた生き物のメカニズムと、気候のメカニズムなど無生物のものがある。
- ②人々が実行しやすいように自分事の部分から始める。自分たち家族の生活習慣病も育ちの狂いも、環境問題と同じ自分たちの生活の自然のメカニズムを壊す部分が原因だから。
- ③「自分も生き物だ」を意識できるようになると、自分の土台が変化し、価値観が変わり、行動が変わってくる。

このような要点に参加者はほぼ賛同。で、その後の議論が白熱した。



企業と環境 NPO との協働を進める戦略会議

実施者：川嶋直(財団法人キープ協会)

中野民夫(ワークショップ企画プロデューサー)

近藤修一(エス・ピー・ファーム)、中西紹一(プラス・サーキュレーション)



【概要】

昨年から引き続き、企業と環境NPOの協働を促進するために、①企業や②NPO、③つなぐ人(コーディネーターやコンサルやメディア)に分かれ、お互いが協働を考える時や理由、期待すること、期待されると思うこと、などを話し合い、最後に「協働のための5か条」をまとめて、発表しあった。

13:30 オリエンテーション

13:45 チェックイン：簡単な自己紹介
(どんな人がどんな思いで来ているの?)

14:15 グループ分け1
①企業、②NPO、③つなぐ人、
各2グループずつ、計6グループ

14:20 スウェーデン視察から得られた協働へのヒント(中西)
・企業、行政、NPO/NGOの適度な緊張関係
・キーワード"Shared Value"
・バックキャストとダイアローグ

14:35 グループディスカッション1
①協働を考える時・理由。
②協働へのお互い(企業・NPO・つなぐ人)の期待

15:25 全体発表

15:45 CSR推進ツール
・CSR主要要素のマトリックスについて(近藤)

15:50 グループ分け2
・企業、NPO、つなぐ人の混成グループ、計6グループ

15:55 グループディスカッション2
・10年スパンで協働を進めるために大切なこと
・企業とNPOの「協働のための5か条」作り

16:20 発表

【二日目(Part II) 9:00~11:30】

・参加者：約40名
・概要：チェックインのあと、具体的なケースを含む6つの分科会で進行した。

◎「企業と環境NPOの協働のための5か条」(前日の6班のものを統合)

一. (目的)
お互いに何をしたいかはっきりさせた上で、共通の大きな目的を築き、関係者全員で共有しよう。

二. (ストーリー)
目的を達成するための「ストーリー」(時、場所、体制、仕組み)を事前に作って始め、試行期間も設けよう。

三. (相互理解)
独自性・専門性・予算決算などの情報開示を進め、対等な視点で、相互理解を深める努力を重ねよう。

四. (評価)
評価しあえる共通の価値基準を築き、あらゆる場面で、率直に相互評価しよう。

五. (成果)
得られた成果は共有し、批判と賞賛を共に受け、NPOに適正な報酬を支払おう。

ESD を広める人のための「ESD 入門講座」

実施者：村上千里(ESD-J 事務局長)



【目的】

持続可能な開発のための教育（ESD）が徐々に広がり始めている。環境省や文部科学省、教育委員会などの環境教育担当者研修でもESD入門のリクエストが増えてきた。このWSでは、ESDを伝える立場になる人を主な対象に、ESD-Jが開発した「ESD入門講座」を体験いただき、そのブラッシュアップや対象者に応じたアレンジについて参加者で検討することで、「ESDを伝える難しさ」を共に乗り越えるヒントをつかむことを目的とした。

【実施内容】

- 13:30～ 主催者オリエンテーション
- 今日のワークショップのねらいと進め方の説明
- 13:40～ 自己紹介
- ①どこのだれ？ ②環境教育歴 ③ESDを知ったのは？ ④ESDで思うこと
 - 参加者は、環境教育歴15年選手6名、2年未満5名の計11名でした
- 13:55～ パワーポイントを使ったプレゼンテーション(1)
- ESD-JとESDの10年のはじまりについて
 - 持続不可能な世界の状況のデータ（環境・貧困・紛争・富の偏在など）
- 14:10～ グループワーク：身近な暮らしと世界の問題をつなぐ
- 2グループに分かれ、「食」をテーマに気になることを書き出す

- 私たちの食生活と、世界の環境問題・世界の貧困とのつながりを考える
- 共有（フードマイル、産地の環境破壊、産地の生産者・外食/中食産業を支える労働者の労働環境・労働条件、食物の来歴を見えるようにするのが大切！など）

14:45～ パワーポイントを使ったプレゼンテーション(2)

- ESDで育みたい能力、価値観・・・「社会に参画する力」
- 現在の学習を活かし、ESDに取り組むヒント

15:10～ 休憩

15:20～ 全体ディスカッション(1)

自分の活動の中にあるESDを語り合う

16:10～ パワーポイントを使ったプレゼンテーション(3)

- 事例紹介（今回は超駆け足で）
- ESDを地域で推進する仕組み＝つなぐ仕組みの重要性

16:15～ 全体ディスカッション(2)

入門講座の改善点

16:55 終了

【全体ディスカッションから（抜粋）】

- (1) 参加者の活動の中にあるESD的アプローチについて
- ゼミで学んでいることを社会に伝えていくことが私のESDだと思った
 - 大学とNGOで循環型インターンシップの仕組みをつくらうとしている
 - 労働組合活動の中で「働く」ということを考え直すことが必要だと感じた
 - 農学部と短大の栄養学科との共同学習を行っている
 - 畑から食卓までの食育ファーム、親子で「お外で食育キッチン」など
- (2) ESD入門講座のブラッシュアップ
- 各自がESDを自分のコトバに置き換えることが大切
 - ESDはエッセンス？方法？考え方？目標？そこがぼやけていてわかりづらい
 - 世界の課題と自分をつなぐ食のワークは有効。「えび」「ハンバーガー」など、スタートをもっと絞り込んだらわかりやすいかも

環境教育基礎講座

実施者：安西英明(財団法人日本野鳥の会主任研究員)

稲本正(オークヴィレッジ代表)

小澤紀美子(東京学芸大学教授)



【概要】

主に初めての参加者を対象に基礎的な知識や情報を提供することを目的として、3者で1時間ずつを担当した。

【小澤紀美子】

「外なる自然」破壊と「内なる自然」破壊という問題点に続き、時系列で環境教育の国際的な動向と、日本の動向が整理された。さらに環境教育の課題と理念、ねらいなどをまとめながら、「持続可能な発展に向けての環境教育」として、学際的・システムシンキング・参加型・問題解決型・多様性・総合的・連帯性や協調性などのポイントが示された。「地球温暖化防止のための環境教育プログラムの開発と研修」という具体例も紹介され、「社会発展への最も確かな道は、環境の管理について理解と関心を持ち民主的なコミュニティづくりに積極的に参画して活動する市民を育てること」という Roger Hart の言葉で締めくくられた。

【稲本正】

「心に木を育てよう」と題し、森林と環境教育をテーマに話があった。まず、国別のCO₂排出量、過去から未来のCO₂濃度の変化予測、森林の吸収力など

の具体的なデータとともに、環境を取り巻く現状がいかに危機的であるかが示された。日本の資源として水と森林がいかに重要か、また、日本の森林の現状と木材の利用実態も論じ、食品や木材の自給率が低い問題点とその解決策として、日本産の木材使用を普及する森林環境教育の具体例が紹介された。競争より相利の関係が注目されているとして共進化の概念も説明しつつ、最後には異なる樹種で音階を変える楽器が紹介され、参加者も実際に触れながら興味津々な様子であった。

【安西英明】

持続可能な自然の仕組みを知るキーワードとして「命のさまざまとつながり」が提示され、私たちがそこからはみ出しながら得ることができた文明の素晴らしさと危うさ(人間の常識は、地球の非常識)が指摘された。命のつながりを感じるプログラムとして「タネの作戦」が紹介され、一同、野外に出て小鳥に食べてもらうことで散布されるタネ(小鳥の主食である虫が減る季節に色づき、小さく飲み込みやすい)、けものについて運ばれるタネ(ネバネバやトゲトゲで衣類にもくっつく)、風に飛ばされるタネ(プロペラのような飛ぶ仕組みがある)などを探した。

生物多様性と環境教育について

実施者：徳永豊（スリーヒルズ・アソシエーション）

浜本奈鼓（くすの木自然館）



生物多様性という言葉でピンと来る人はいますか？いったいどういうことだろうと思われる方、またちょっと興味がある方、どんな方でも結構です。今、生物多様性国家戦略会議の見直しが行われています。その委員をお呼びして今どんな会議が実施されているのか聞いてみませんか、また各地域の事例を聞きながら一緒に考えてみませんか。

まず自己紹介を兼ねて、①どこから②何をしている③何を求めて④持ち帰りたいもの、を個別に聞くことから始めた。少し紹介すると、地域は、石川、大阪、東京、岐阜、三重、神奈川、広島、長野、千葉、栃木、愛媛、山口、鹿児島と全国から参加者がありました。環境省、大学、NPO法人、JICA、地方自治体、財団法人等の参加がありました。

何を求めてきたのかという問いには、

- ①生物多様性がどのように伝えられて、どう取り組むのかをつかみたい
- ②生きものの調べ方を知りたい
- ③種の絶滅の現状はどうなのか
- ④生物多様性の取り組みのヒントをつかみたい
- ⑤生物多様性の勉強のため
- ⑥生物多様性について多くの人に認識してほしい
- ⑦JA、農地、水、農家のサポートをしていきたい

⑧生物多様性についてどんな仕事があるのか

⑨伝え方のヒントをつかみたい

⑩生態系と生物多様性について、その違いはなにか

⑪活動メッセージの伝え方

⑫複雑であると認識している

さらに、持ち帰りたいもの、という問いに対して

①地域の人に興味を持たせたい

②入り口、出口を知りたい

③活動の状況、里山保全の仕方について

④現場が大切、課題工夫は？

⑤どんな得があるのか説明できるように

⑥企業のアプローチの仕方について(利益とつながる)

生物多様性については、まずはその入り口論が論議されていて、現状をどう認識し、どう取り組んでいくのかがまだ見えないというのが大方の意見であったと思います。このワークショップは3年かかりで取り組んでいこうと考えています。まずは、各地の現状報告を聞いてもらい、その上で、浜本からは、干潟のピラミッド（食物連鎖）の事例を通して、生物多様性を理解をしてもらいました。環境省からは担当課長さんの出席をいただき、国がどう取り組んでいるのかという報告をいただきました。

科学と環境教育

自然体験からライフスタイルの転換へ

実施者：小河原孝生 (NPO 法人生態教育センター)

河原塚達樹 (財団法人日本レクリエーション協会)

北野日出男 (JEEF 会長)、湊秋作 (財団法人キープ協会)

ゲストスピーカー：南正人、古川和 (NPO 法人ティーチングキッズ)



ワークショップ冒頭にこれまでの議論を参加者と共有するために、南正人氏から「これまでの成果と今回ワークショップの問題意識」と題して、20分ほどのミニ講義を行ってもらった。そこでは、「観察→疑問→仮説→実験→観察」という科学的手法のループのない情緒的・感性的な自然賛美では、自然への深い理解に到らず、それは、深い感動をも阻害するのではないか、との考え方である。

それらを受けて、自然科学の手法を活用したプログラムをどう個人化し、単なる体験に終わらせずに自分自身のライフスタイル転換につなげていくのか、湊秋作氏によりヤマネのプログラムを提供してもらい、体験しつつ考えた。

湊氏はヤマネの研究者として著名だが、会場となった八ヶ岳自然ふれあいセンターからヤマネミュージアムまでのわずかな間にリョウブ、サラサドウダンツツジ、カラマツ、アリマキなどヤマネの食べ物、棲む場所、巣材などに役立つ多様な自然について詳細にわ

かりやすく解説。「ヤマネの生き方」が参加者に伝わっていった。その後、会場に戻り、GEMSの普及に取り組む古川和氏が、問題を個人化する手法としてグループにより「ヤマネが横浜からいなくなった謎にせまる」というプログラム案を紹介した。

再び、湊氏の時間となり、本格的な冬眠に入る前の就寝中のヤマネを実際に巣箱からだし、ヤマネの体温の時間変化を観察した。ヤマネの愛らしさにとどまらず、わずか30分程度の時間に10度以上も体温をあげる環境に適応した体温調節能力をはじめヤマネの樹上に生きる見事な生態(生き方)に参加者は感動を深めた。さらに、海外でのヤマネの捉え方、ヤマネと文化の関わりなども紹介後、開発により森がなくなることなど、人の暮らしとヤマネの関わりにもふれ、最後にヤマネから自分の暮らしに応用できるものは何か、KJ法により一人ひとりにアイデアを出してもらい、個人の生き方にも迫った。

このプログラム体験の後、ヤマネのすぐれた能力のどこに注目するのか、同じ能力を選択した人同士でグループを作り、各グループごとに自然体験プログラム考えた。おおよそ1時間という短い時間だったが、各グループからはさまざまなアイデアが出され、湊氏も今後の参考になると多様なアイデアに頬を弛めた。

その後、個人化に向けて大事なことは何か、フリーディスカッションを行った。プログラム評価の問題、文明論、ツーリズムのプログラムでの成立可能性など、議論は多岐にわたったが、自然科学の手法を活用したプログラムの重要性を確認できたワークショップとなった。

メディアと自然学校

実施者：山川勇一郎(ホールアース自然学校)

木南憲一(SBS 静岡新聞)



【ワークショップ実施者のおもい】

自然学校は概して宣伝下手。一方でメディアは価値のある情報を求めている。

その双方がお互いの立場で意見を言い合い、自然学校とメディアのより良い協働の形を探りたい。

【ワークショップの流れ】

1. 実施者(2名)・参加者(14名)の自己紹介
2. ホールアース自然学校、SBS 静岡新聞の事業説明、協働の事例紹介
3. ディスカッション
 - ①協働のきっかけ
 - ・お互いが常にアンテナを張っておくことが大事
 - ②メディアへのアプローチのポイント
 - ・企画書や報告書を直接送付するなど具体的なアプローチ
 - ③メディアウォッチ、メディア研究
 - ④媒体の特性を把握する
 - ⑤受けの広報戦略としてのHP
 - 「見る側」の立場になって 写真の多用。情報の定期的なアップ。
 - ⑥関係作りのポイント：
 - ・まずは、体験してもらい、自分たちのやっていることを理解してもらう

- ・常にホットな情報を提供する
 - ・継続的にコンタクトをとり、存在を認知させる
 - ・本部(広報部)と現場(支局)の双方にアプローチ
 - ・メディアを利用する、というスタンス
 - ・メディアとメディアの人の特性を知る
4. まとめ
 - ・紙芝居を並べて、議論をなぞる
 - それぞれの立場で実践するに当たってのヒントになれば

【実施者の所感】

- ・「自然学校」と「メディア」の2者の立場からワークショップを組み立てたが、企業や行政、広告代理店、他のメディア(雑誌)等様々な立場の人が参加し、結果的に幅の広い議論が出来た。
- ・自然学校の「イイコトをやっても伝わらない」という部分の大きな原因が「メディア側への理解不足」であり、その部分に今回光を当てることで相互の理解促進の足がかりになったのではないかと。

環境経営戦略ゲーム体験会

実施者：鶴ヶ谷優子(社団法人日本環境教育フォーラム)



環境の改善や環境への配慮を期待するためには個人個人が環境問題や環境そのものに関心を持つ事が有効であると考えられています。この環境経営戦略ゲームは環境と経済を結びつけ話題にしていくきっかけになることを狙って作成されています。

当ゲームは相談する・人の話を聞く・自分の考えを話すことなどを繰り返して様々な角度から環境と経済についての関心や理解に繋げ、コミュニケーションを図っていくことを目的としています。環境に関心を持ち続けることで日常の企業活動が少しずつ変化し、社会貢献や環境配慮ビジネスにつながり、日常生活も変わり、環境保全に向けた社会になることを願ったものです。「企業が環境に配慮した事業活動を行う意味」、「経済活動を成り立たせながら環境活動やCSRにも力を入れる意味と効果」、などを楽しみながら理解に繋げることに役立つかと考えています。

今回は清里ミーティングに参加された方々に当ゲームを体験していただき、企業活動と環境との関わりや、企業の環境活動について知っていただくとともに、このゲームの有効性や活用方法について様々な意見を頂きました。

<環境経営戦略ゲームについて>

プレイヤーが会社の経営責任者となって様々な事業が書かれているカード(事業カード)を選び、選んだ事業から得られる3つのポイント「収益」「環境への配慮の度合い」「社会からの環境評価」の得点を競い合います。プレイヤーが獲得した各ポイントによって格付を行い、経済・環境共にポイントの高いプレイヤーがエクセレントカンパニーとなります。

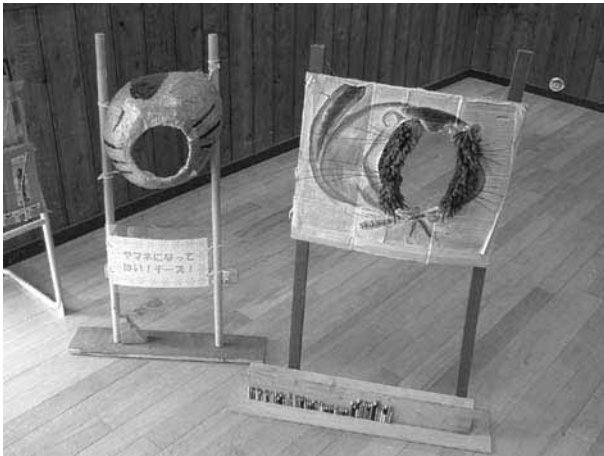
- ① 2人1組でチームを組み、1チーム1枚ずつ「事業カード」を選択します。
- ② 「事業カード」に2～3通りある運営方法を2人で相談しながら決めます。
- ③ チームごとに選択した事業と運営方法を発表し、得られたポイントを加算します。
- ④ ゲーム終了後に獲得ポイントを集計し、発表、ふり返しを行います。

<参加者からの感想>

- ・ゲームの内容の中で理解できない所もあったが、自分ではわからなかった考え方を知ることができ、勉強になった。
- ・「経営」の視点はとても大切だと感じる。自分のお財布をどの様に環境へ上手に運用していくか、常に日常生活費に絡めて考えることは、一般に伝わりやすい。
- ・このゲームは、設問作成が非常に難しいなと感じました。特にバイオ燃料の問題など、相当な知識がないと(むしろあればある程)、混乱してくる気がしました。もっと内容が平易であっても良かったかも知れません。
- ・ずっとやってみたかったので、体験できてよかった。
- ・企業での研修にはすごく良いと思った。但し、ファシリテーターが必要な点で(←と感じた)、改善点は多々有るが、可能性は大きいですね。

体験型展示物を評価しよう

実施者：河野宏樹・吉永一休 (Eco-Navi 研究所)



現在の博物館やビジターセンターなどの施設展示では、ビジターが直接ふれることのできるハンズオン展示が数多くある。しかしながら残念なことに、ビジターが展示物にふれる時の動作（めくる、のぞく、など）と、ふれるときに得られる情報との関連性がない場面も見受けられる。そこで、このワークショップでは、動作とその結果得られる情報がうまく連動するような体験型展示物を制作するためのアイデアを探ることとした。

最初は、参加者同士のざっくりぼろんな情報の交換からはじまり、参加者が予め撮影してきた展示物に関してお互い紹介しあった。また Eco-Navi 研究所でも、まわす、のぞく、引き上げるなど動作を視点の切り口にして既存の展示物を紹介した。このようにして画像による展示物の現状を確認したのちに、実際にやまねミュージアムに行き、そこの展示物も確認、検討材料とした。

参加者同士の一定の共通言語を作った後に、グループワークに入った。ここでは、特に体験型展示物の動作にこだわりながら、具体的なアイデア出しを行なった。例を挙げると、東京ガスエネルギー館における、

「環境負荷の分かるレジ」は TV 番組のネタから発想を得たもので、インパクトもあり実践的なものとして注目された。生活の中で買い物は必須であるが、その見た目からはどれだけの環境負荷があるかは分かりにくいものである。このレジでは、環境負荷の高いものほど、高い金額になるように設定されており、どんなものが環境負荷が高いのか、興味をもって知ることができるように工夫されている。

翌日の戦略会議においても、同様のテーマで引き続きディスカッションを行なった。特にくすの木自然館における、具体的な展示物のアイデア出しを行なった。例としては、ミサゴが魚を捕まえるときの特徴的な足の使い方を体験的に分かるものなどが挙げられた。その他にも様々なアイデアが出てきたが、伝えたいコンテンツをカタチにする作業が参加者にとって難しいものであることを感じた。

また、昨年までのワークショップでは取り扱ってきたことであるが、実際伝えるべきコンテンツが持つ目標の精査の作業は、継続して取り扱うべきテーマだと感じた。

エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!

実施者：木村太郎(ナショナル・パークガイド)

荒井一洋(NPO 法人ねおす)



エコツアーという言葉がいろいろなところで使われ始めています。多くの方がその言葉を知っている状況ですが、実際にそのツアーに参加するまでにはいたっていない方が多くいます。ちょっとしたきっかけがあれば参加しそうなエコツーリスト予備軍がどこにいるのか、それを探ることが今回のワークショップのねらいです。

まず、北海道ねおすの荒井と上高地NPGの木村の、二人のエコツアーガイドが実際の現場の話をし、エコツアーについての共通認識をしました。参加者からもエコツアーの定義などの質問が出て、活発な質疑が行われました。

そのあと実際に予備軍がどこにいるのかを探す作業をグループワークの形で行いました。ただ、エコツアーに参加しそうな人といっても、実際に自分たちの身の回りにいて声かけられる人という条件の下、まずは洗い出しを行いました。身の回りにはいるのであれば、実際にチラシなどを作って声かけられ、すぐにもエコツーリストになってくれる可能性があるということでそのような条件をつけました。

話し合いの中、出てきたのは次のような人々でした。「子育て中のお母さん」「失恋をした女性」「保育

士さん」「IT企業の社長さんもしくは疲れた社員」などなどいろいろな人たちが浮かんできました。

次にこうした人たちが参加するツアーはどんなものがあるのかという議題で、実際にプログラムのキャッチフレーズを考えたり、どのような場所でのどのようなものを提供すればいいのかなど話し合い、プログラムの簡単なデザインを行いました。

失恋をした女性には「きれいな夕日を見ながら…」とか、IT企業の社長さんには「社員が鬱にならないためのエコツアー」などいろいろな企画が出てきました。

話し合いの中から出てきたアイディアは参加者にとって参考になったようで、実際の活動にもつながったようです。また、いくつかの団体が手をつないでツアーをできればという話が出てきたところで、フリーワークの時間をとり、終了となりました。

参加者の方から多くのアイディアをいただき、実施者も楽しい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育

実施者：小林修(愛媛大学農学部森林教育)

斉藤智子(NPO 法人自然環境教育えことのは)



持続可能な社会を実現するためには、社会を構成する全ての人々の参画、とりわけ障害者の方々の参画が欠かせません。今回のワークショップでは、持続可能な社会の実現を目指した森林環境教育活動において、障害者と共に楽しみ・学ぶ活動事例や教材づくりについて参加者どうしで情報を共有し、活動の場をより広げていくことを目的としました。

今回のワークショップにご参加いただいた皆さんは、すでに障害者の方々と交流経験のある方あるいはこれから交流していこうと考えている方々6名でした。少数精鋭となりましたが、その分ゆっくりと時間をかけて情報交換を行うことができました。ワークショップは以下の流れで実施しました。

- ・自己紹介（ワークショップに参加した理由の披露）
- ・視覚障害者とともに楽しむ森林環境教育の疑似体験
- ・情報提示：今なぜ環境教育は障害者に着目しなければならないのか
- ・五感で楽しむおやつタイム
- ・グループワーキング「障害ってなんだろう？」

ワークショップ前半では、私がこれまで展開してきた視覚障害者向け森林環境教育の疑似体験と情報提

供を行いました。視覚障害者役とガイド役を交互に体験しながら、視覚障害者をガイドすることにはコツがあること、そして視覚を遮ることによって他の感覚が鋭くなることを実感しました。

途中のおやつタイムも、視覚を遮ってクッキーと飲み物を楽しみました。ここでも、ナッツ入りクッキーの強烈な食感に驚き、喉を通っていく破片を敏感に感じとることに新しい発見を見ました。障害者と健常者の立場が逆転するこの瞬間こそ、新しい環境教育のあり方が隠されていることをみんなで共有しました。

最後のグループワークでは、障害が現代社会では弱みであるように見えて実は個性、特徴なんだということを確認しました。そしてその特徴が、持続不可能な社会を持続可能に転換させる力があるということをもみんなで確信しました。

今後、障害者とともに展開する環境教育を各自で積極的に実践し、多くの方々を巻き込みながら活動をより広く広めよう！と約束をして時間を迎えました。

今後、障害者とともに活動することを考えている皆さん！ぜひ私までご連絡下さい！

やってみよう!!体感ツリークライミング®の世界

実施者：ジョン・ギヤスライト・川尻秀樹・安藤義樹(ツリークライミング®ジャパン)

協力：TCJ(ツリークライミング®ジャパン)スタッフ

上田康美、加藤安雄、下司高明、原孝昭、飯塚正明、渡邊昇、渡邊剛俊



「木と友達になろう」をテーマとして、大人から子どもまで、また、身体的・精神的障害を持つ方でも、誰でもチャレンジできるツリークライミング®について実体験を通しての理解を深め、森林環境教育の観点からもその可能性を検証すべく野外での実体験ワークショップを行った。

単に見たことがあるのと実際にやってみるのでは、大きな違いがあるということへの気づきを目指し、日頃は写真や映像、マニュアルやうわさの聞きかじりだけでわかったような気に陥りがちな現代人の反省もこめたワークショップの展開を志向した。

実施当日は雪まじりの寒風の中での開催となり、参加者・スタッフとも相当に寒い野外実施であったが、その寒さを忘れさせるくらいツリークライミング®の楽しさや樹上の世界に想像以上に感動したという参加者の声が多数寄せられた。

ワークショップ参加者は、2つのグループに分かれ一般の体験イベント同様ツリークライミング®で木に昇るグループとツリークライミング®関連アクティビティとしてのスローライン・テクニック、「ツリーボート」の体験等を行うグループに、前後半交替で実

践をした。あわせてツリークライミング®のイベント時に木と心を通わせる一手法として実施される「モクモク体操」(木のものまねストレッチングをアイスブレイク準備体操として行うもの)、ツリークライミング®は生き物を相手にするアクティビティであることを再認識するためのイメージワークショップなども組み入れた。

盛り沢山な内容で3時間ではややタイトなものとなった感は否めないが、参加者からはこのワークショップを手始めとして更なる実践の希望が多く寄せられ、参加満足度は概ね高かったものと思われる。あわせて森林環境教育としての樹木や森林生態系の理解、生命の営みへの感謝や畏敬の念を想起させるテーマ設定も盛り込むことができた。木への接触というアプローチにより、人が木に命をゆだね、自己を開放できるツリークライミング®というアクティビティの有効性をあらためて再評価、確信するワークショップの実施となった。

実施者側の反省としては技術面など、今回のワークショップではどのレベルまでを解説に盛り込むのか、事前の想定をスタッフ間にもう少し明確にしておくべきであったと考えている。

1日目・2日目

オプションプログラム

今が旬の活動事例紹介

1日目：11月17日（土）午後／八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

／清泉寮本館ホール

／清泉寮ハンターホール

／清泉寮アンテレホール

スライドプレゼンテーション

1日目：11月17日（土）夜／八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

／清泉寮本館ホール

2日目：11月18日（日）夜／八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

／清泉寮本館ホール

早朝ワークショップ

2日目：11月18日（日）早朝

◆早朝ジョギングワークショップ

◆センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩

◆清里ミニガイドツアー

今が旬の活動事例紹介

1日目：11月17日(土)午後 会場：八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

◆キャンプ場からライフスタイル提案型リゾートへ PICA 山中湖ヴィレッジの取り組み

実施者：齋藤薫（株式会社ピカ）

内容：「日本のキャンプは疲れる…そんな日本のキャンプを変えたい」誰でも気軽に、快適に楽しめるアウトドアライフをご提案してきたPICAが、新たな挑戦を始めています。それは、「環境に配慮したライフスタイルの提案」。誰でも楽しみながらエコライフを始められる、そんな姿を目指しているPICA山中湖ヴィレッジの取り組みをご紹介します。

◆川遊びのルールを広めよう！ ～かわらんべの試み～

実施者：村井孝一（天竜川総合学習館かわらんべ）

内容：街に交通ルールがあるように、川遊びにもルールがあります。『危ないから川に行ってはいけないよ。』ではなく、「何が危険なのか」を知る事からはじめてみませんか？

◆能登里山マイスター養成プログラム：能登にトキ再び

実施者：中村浩二（金沢大学）

内容：「能登里山マイスター養成プロジェクト」は、能登の里山里海の自然と伝統文化を継承・発展させる若者を求めています。働きながらまなび、能登に定住して、エコツーリズムや環境配慮型の農林水産業を始めませんか。

◆アニマルパスウェイ

実施者：湊秋作（財団法人キープ協会）

内容：今回皆様にご覧頂いたスライドのキーワードは、「生物多様性」。その生物多様性保護の具体策の一つとして提案する、樹上性動物の保護を目指すアニマルパスウェイ紹介スライドです。

◆生物多様性は子供に伝わるか？（行事効果測定より）

実施者：渡辺初恵（財団法人日本野鳥の会 横浜自然観察の森）

内容：横浜自然観察の森では、2002年より「いきものにぎわいのある森」を目指し、様々な取り組みを行ってきました。「いきものにぎわいのある森」はどのくらい子供たちに理解されているのか？行事のアンケート結果からお話しました。

◆子どもだけの環境保全ワークキャンプ・「タンチョウレンジャーにチャレンジ！」

実施者：五十嵐多鶴子（財団法人日本野鳥の会 普及室）

内容：この夏、日本野鳥の会は釧路湿原の「鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ」を会場に子どもだけのワークキャンプを開催しました。3日間を通して、タンチョウや湿原の自然にふれあい、まなび、まもる。地球の未来を担う子どもたちに向けた新たな取り組みをご紹介します。

会場：清泉寮本館ホール

◆愛媛大学 山～里～海～人をつなげる環境 ESD の挑戦

実施者：小林芽里（愛媛大学 瀬戸内環境 ESD）

内容：愛媛大学では、昨年10月から、環境教育を通して持続可能な社会づくりを担う環境 ESD 指導者育成を展開しています。高等教育における体験と知識のバランス、分野横断的な ESD のカリキュラムづくりに試行錯誤中です。

◆ヒトも生物多様性も絶滅危機の農村における環境 ESD の取り組み構想

～中国地方中山間農村における「田んぼでがんぼプロジェクト」～

実施者：猪谷忠信（愛媛大環境 ESD/現在 JA 世羅）・日鷹一雅（愛媛大・農）

内容：先日、NHKで再三「日本農業はどうなる？」といった類の番組がゴールデンタイムに放映されていた。日本の農業・

農村・食料の持続可能性は、危機的状況だという。実は日本だけでなく、アジア諸国を始め世界中で農民・漁民の人々など、自然に日々向き合い命をつくるヒトは、絶滅危機にあるくらい激減…。じゃけえどうするん？あの手この手の試行錯誤紹介。

◆環境教育と実践的ソーシャル・イノベーション研究

実施者：西村仁志（同志社大学）

内容：同志社大学大学院総合政策科学研究科では、昨年度から「ソーシャル・イノベーション研究コース」を開設し、学外実験施設を活用した実践研究プロジェクトを開始しました。環境教育にまつわるプロジェクトを中心に紹介いたしました。

◆大学と社会を繋ぐ～廃油 Car で日本一周のエコ旅～

実施者：中澤朋代（松本大学）

内容：昨年・今年の2年間、観光学科の学生が自主活動でバイオディーゼル車（廃油 100%）での旅を通じて、環境メッセージを社会に発信しました。この具体的内容を例として、大学の現状を紹介、社会との繋がり・可能性を探ります。

◆3時間で何が変えられるか～35万の子供が来る現場より

実施者：森田孝道（日光自然博物館）

内容：日光には首都圏からの学校団体が、年間 35 万人訪れます。教育旅行の限られた時間の中で、どれだけ自然や環境について関心を高められるのか、どれだけ多くの子供に働きかけることができるのか。日々挑戦する、私たちの活動を紹介しました。

◆国際協力と環境教育～世界の途上国での取り組み～

実施者：佐々木大吾・竹田進吾（独立行政法人国際協力機構）

内容：開発途上国での環境教育はどうなっているの！？途上国での環境教育を推進するために実施しているプロジェクトや、青年海外協力隊などのボランティア派遣といった JICA の取り組みについて、現地での活動紹介をしました。

◆木と友達になろう!! ツリークライミング®の世界

実施者：ジョン・ギャスライト・川尻秀樹（ツリークライミング®ジャパン）

内容：『ツリークライミング®』は、いわゆる『木登り』とは違います。木を取り巻くいのちの営みを感じながら、誰もが木に近づき木と友達になれる…国際仕様の手法に学ぶそんなアクティビティの実践が始まっています。

会場：清泉寮ハンターホール

◆Cゾーンを越えて

実施者：塚原俊也（くりこま高原自然学校）

内容：くりこま高原自然学校が体験学習法と冒険教育を基に 2000 年から取り組んでいる、悩みを抱えた青少年のための長期寄宿の今をスライド（パワーポイント）で紹介します。私たちが何を大切にしながら、若者たちと向き合い関わっているのかをお伝えしました。

◆学生のチカラで社会をカエル！学生環境サークル誕生

実施者：田中啓介（ホールアース自然学校）

内容：チームマイナス 6%の取り組みとして、沖縄ホールアース研究所と琉球放送が連携。環境教育 NPO が学生環境サークル EARTH☆FROGS を組織し、地元企業や行政と一緒に、社会をカエル取り組みを展開中。

◆高尾の森わくわくビレッジでの環境イベント

実施者：木村維沙子（京王電鉄(株)高尾の森わくわくビレッジ）

内容：今年度実施した環境イベントについて、その目的・実施内容・効果を紹介しました。小学生対象「環境を学ぶエコキャンプ」・従業員対象「環境研修」 いずれもわくわくらしく「楽しく環境を学ぶ」をテーマに実施しました。

◆三井物産の環境教育 ～社有林と三井物産環境基金

実施者：新谷大輔(三井物産株式会社 CSR 推進部)

内容：三井物産は、全国 73 ヶ所 44,000ha の社有林を保全すると共に、環境教育の場として活用。また三井物産環境基金では NPO への助成、及び助成先との協働プログラムを実施中。現在は社員プログラムが主ですが、様々な活用を考えたいと思います。

◆企業の環境価値向上を視野に入れた環境教育支援活動

実施者：田中丈夫(東京電力 環境部)

内容：電力会社の基本的な CSR は、電気を安全に安定的にお客さまにお届けすることです。東京電力では、CSR 活動の一環として、発電所の豊かな緑地や、国民的財産である尾瀬などの自然資産を活用し、環境教育の支援を行っています。

◆環境教育の新しい潮流 — 坂本、中沢、辻、そしてマダガスカル

実施者：稲本正(オークヴィレッジ代表)

内容：音楽やスポーツや芸術といったジャンルで、今までにない新しい環境教育の試みが為されている。更に「食育」に加えて、木の性質から森を想像する「木育」も浸透しつつある。「知・情・意」のトータルな新たな試みを紹介しました。

会場：清泉寮アンデレホール

◆楽しんでみませんか…人にやさしい旧暦(月と季節の暦)ブーム到来?の予兆

実施者：齊藤透(月の会(東京))

内容：旧暦は俗信ではなく、とても科学的で、自然の循環を見事に表したものです。西暦とは異なる時の概念はスローライフにもじっくり馴染み、自然を身近に感じられる素敵なお道標。環境に携わる方の基礎知識とも言えそうです。昼と夜、二倍楽しめるのもお得。

◆森の再生から心の再生へ

実施者：田村桂子(財団法人 C.W. ニコル・アフアの森財団)

内容：財団法人 C.W. ニコル・アフアの森財団は森の再生活動をしています。活動事例紹介として、多様性あふれる豊かな森は豊かな心を育むことを信じ、盲学校や児童養護施設の子どもたちをアフアの森に招待し、心の成長を見つめている「アフア『心の森』プロジェクト」を紹介しました。

◆森療時間

実施者：川嶋直(財団法人キープ協会)

内容：キープ協会では4年ほど前から実施している、医師とのコラボレーションによる森林療法の体験プログラムを紹介しました。森療時間はキープ協会の造語ですが、森の中での様々な体験を通じて身体と心を癒す時間という意味です。

◆里山キッズクラブ ～日本的でいこう！～

実施者：新田章伸(NPO 法人里山倶楽部)

内容：環境教育を生き方、暮らし方に結びつく段階まで深めていく為には、私たちの生まれ住む日本の自然、文化、価値観を再認識することが必要に思います。日本の環境教育の実践事例として紹介しました。ここから未来へ。

◆木風舎の新しい取り組み ～プロダクション化、生きる力塾 etc. ～

実施者：橋谷晃(木風舎)

内容：創立 25 周年を迎えた、木風舎の新たな取り組みをご紹介します。プロの共同事務所としてのプロダクション構想、都市における新しい環境教育の試み「生きる力塾」、各地の旅館組合などと連携した自然案内人養成による地域おこしなど。

◆自ら持続可能に暮らす”かとうさんちの2年目”

実施者：加藤大吾(アースコンシャス)

内容：お金も地位も名誉も保証もない中で、家から地域との関係まで創ってきた森の中の暮らし。畑の作物、風呂・トイレ

の増築、ゲストハウス建築、子どもたちが作っている小屋、ははとこ cafe、天ぷら油で走る車、集まる子どもたち、何となく始まる日本の伝統食作り、台風の被災、家の雰囲気などスライドで見せます。

スライドプレゼンテーション

1日目：11月17日(土)夜 会場：八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

◆全国の学生環境活動一挙大公開！

実施者：小川桃恵・來住怜美（全国大学生環境活動コンテスト）

内容：出場団体のなんと〇割が環境教育活動団体！！自分達の知識・経験・思いをぶつけ合う2日間。学生と環境活動の可能性について、一緒に考えてみませんか？

◆都市型環境教育施設でのインタープリテーション

実施者：大野裕子・荻沼大二・富田由起夫・山口真織（東京ガス環境エネルギー館）

内容：東京ガス環境エネルギー館は横浜市にあります。都市型環境教育施設ならではのプログラムの一部をご紹介します。「環境問題を身近なものとして捉え、日常生活の中で自分たちにできることを考えてみよう！」

◆アニメーション映画・ワイルドバードシンフォニー第一番「白いファンタジア」

実施者：安西英明（財団法人日本野鳥の会）

内容：この度、日本野鳥の会では、子どもたちや自然大好きな方々向けに、タンチョウを始め自然の大切さや命の大切さを伝えるアニメーション映画を製作しました。本作品は、子どもたちに夢と感動を与える事業として、全国の児童養護施設などに寄贈しております。ご覧いただき、施設などで上映いただけるという方にはDVDを差し上げます(数に限りがあります)。

会場：清泉寮本館ホール

◆柏崎・夢の森公園 ～環境学校の活動紹介～

実施者：樋山和恵（柏崎・夢の森公園）

内容：柏崎・夢の森公園は、里山の復元と創造を目指し、21世紀の暮らし方を考える場として今年6月にオープンしました。公園を拠点に、柏崎の豊かな資源を活かして展開している「環境学校」の体験プログラムを紹介しました。

◆能登を元気づける里山マイスター

実施者：宇都宮大輔（金沢大学能登里山マイスター養成プログラム）

内容：能登には豊かな自然が残されています。人と自然の関わり合いのなかで生まれてきた文化も、数多く残っています。スライドショーでは、能登の自然や伝統文化の現状と問題点を中心に紹介しました。

◆ぶなの森のようちえん@くりこま高原自然学校

実施者：菅原香苗（くりこま高原自然学校）

内容：2005年よりスタートしたくりこま高原自然学校の森のようちえん。今年で3年目を迎えました。ぶなの森のトレイルでいっぱい遊んで成長していく小熊たちの姿を、四季の移り変わりの様子とともにご紹介しました。

◆自然学校における災害後魚類調査の意義について

実施者：宮川雅彦（大杉谷自然学校）

内容：日本各地で災害が起こっています。その後の地域の生態系調査はどのように行われているのでしょうか？大杉谷自然学校では、平成16年の豪雨災害後継続的に調査を実施しています。今回は宮川のネコギギ等魚類の調査結果と自然学校が地域で調査を継続する意義について発表しました。

2 日目：11 月 18 日(日)夜 会場：八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

◆「森と人をつなぐ学校、森林文化アカデミー」

実施者：八尾哲史（岐阜県立森林文化アカデミー）

内容：2001 年、岐阜に突如生まれた公立学校、その名も森林文化アカデミー。既存の学校の概念にとらわれない『地方自治型自由学校』の真の姿を、本校に集うこれまたユニークな学生たちの視点からご紹介しました。

◆小田急沿線「自然ふれあい歩道」散策マップの紹介

実施者：国安俊夫・山口賢次郎（小田急電鉄株式会社）

内容：小田急電鉄(株)の鉄道駅は 70 駅あり、駅を起点に 4~5 kmの散歩コースの紹介。身近な自然や文化財をマップと解説文で詳しく明記し、自然とのふれあいで素晴らしさを体験して頂ける手助けの小冊子を発行。

◆上高地にまつわるエトセトラ

実施者：木村太郎（ナショナルパークガイド）

内容：日本全国には、生きものの名前に関する様々な方言があります。それは、生き物たちが暮らしの身近にあったことの証明。ユーモラスな方言を楽しみながら、彼らと触れ合ってきた文化に思いをはせてみませんか？

◆誰でもチャレンジ・ツリークライミング®

実施者：T J C（ツリークライミング®ジャパン）

内容：大人も子どもも…、幼年から年輩者でも…、身体障害を持つフィジカルチャレンジャーたちも、誰もが楽しく愉快地、でも高度に安全・丁寧に木と親しむ…、これぞ『ツリークライミング®』の醍醐味なのです。

◆お休みスライド

実施者：財団法人キープ協会

内容：清里の四季を音楽とスライドでお楽しみいただきました。

会場：清泉寮本館ホール

◆「森のようちえん全国交流フォーラム」その後

実施者：上田融（NPO 法人ねおす）

内容：昨年度、北海道は登別市にて「森のようちえん全国交流フォーラム」が開催されました。北海道の田舎で行われた全国フォーラムが、地域の皆さんにどんなインパクトを与え、どんな効果を生んだのかを紹介しました。幼児向けの自然体験活動が、地域を元気にします。

◆今の農村で生物多様性を唱える意味って何なんだろう？

実施者：日鷹一雅（愛媛大学）・猪谷忠信（愛媛大学環境 ESD／現職 JA 世羅）

内容：今回ワークショップを見ても、「生物多様性」というキーワードがこの清里にも来航したような。確かに、ここ数年、田んぼの学校などの環境教育や ESD においても、生物多様性の保全は大いに関係してきた感は否めない。でも農村現場ではこう言われる。「多様な生物種の保全??? わしらや村が絶滅危惧なのに、それどころじゃなかりょうに。」で、あたためて考えてみよう。ということです。

◆野鳥観察施設米子水鳥公園の日常

実施者：米田洋平（財団法人中海水鳥国際交流基金財団）

内容：野鳥観察施設米子水鳥公園が成り立ち、飛来する野鳥などの説明をさせて頂いた後、自然環境施設としてどのような活動に日頃力を入れているかを紹介させて頂きました。

◆温泉観光地のホテルでの夏休み体験プログラム取組の軌跡

実施者：山川勇一郎（ホールアース自然学校）

内容：温泉観光地熱海にあって、一夏の有料プログラム参加者数が2,000人→5,000人に大幅アップした原動力は何か？温泉観光地熱海の老舗ホテル・ホテルニューアカオでの、地域資源をフル活用した5年間の取り組みを紹介しました。

早朝ワークショップ

2日目：11月18日(日)早朝

◆早朝ジョギングワークショップ

実施者：松村正道（M&I研究所）

内容：小鳥や動物達は、日の出と共に起きて、餌をあさり水を飲み、恋をしてまた日暮れと共に巣にかえります。早朝ジョギングワークショップでは、動物の1種である人間が、清里の日の出（午前6:35）と同時に野山を駆けて、この忘れてしまった感覚を思い出させてみようとするプログラムです。寒い、眠い、しんどい、の三悪に打ち勝って清里の唐松落ち葉を踏みしめながら走りました。



◆センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩

実施者：桃井泰彦（木水土里研究所）

内容：自然はいつでも、私たちにビックリさせ、不思議がらせ、楽しくさせ、ホッとさせるものを用意しておいてくれます。あとは、私たちがそれをどう見つけられるかです。五感をはじめ全身の感性を働かせて見つけに行きました。



◆清里ミニガイドツアー

実施者：財団法人キープ協会

内容：せっかく清里まで来て、森の中を歩かずに帰るなんてもったいない！ちょっと寒いけど、それもまた、清里の自然が見せてくれる顔のひとつ。キープスタッフが、みなさまを清里の森へご案内しました。

2 日目夜

J E E F の集い

司 会 :	(社) 日本環境教育フォーラム理事 中野民夫
「JEEF って何？」	(社) 日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋直
	(社) 日本環境教育フォーラム事務局長 大黒栄二
「JEEF の社会的役割と課題」	(社) 日本環境教育フォーラム理事長 岡島成行

JEEFの集い

司会：(社)日本環境教育フォーラム理事 中野民夫

JEEF の集いということから1時間、全体での会を行います。JEEF の集い、何か言葉足らずな感じがすると思いますが、以前は JEEF 会員の集いとしていました。皆さんにはその意識があるかどうか、ここにいる全員が JEEF の会員になっていますが、知っていますか。これまで JEEF の会員でなかった方も、制度上、清里ミーティングにご参加下さった方は、もれなく1年間会員無料という特典がついていますので、1年後それを継続するかどうかは皆さんのご意思にかかっています。皆さんが会員だという意識で、JEEF の集いは皆さんの集いです。



(社)日本環境教育フォーラムを略称で JEEF と言っていますが、J.E.E.F. (Japan Environmental Education Forum)の略だということ、おわかりいただいていますでしょうか？今日は初めての方も多いということで、「JEEF って何？」ということを取務理事の川嶋さんと事務局の大黒さんから少しお話しします。また、その理解を深めるための質問もお受けします。その後、「JEEF の社会的役割と課題」について、何故こうして集っているのか、何故それが社会的に大事でどういう力になってきたのか、今まだ抱えていたりできていないこと、この辺を理事長の岡島成行さんから話をし問題提起します。それを受けて4人組くらいで、この JEEF に関わった人間として、JEEF を利用して活かしてやりたいことなどを話し合っただき、皆さんから発表していただく時間がないと思うので、お渡しした白紙に JEEF の一員としての提案を書いていただければと思います。

「JEEF って何？」

(社)日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋直

簡単に JEEF についてお話しします。「人と自然、人と人、人と社会」をつなぐ NGO、という言い方を最近はしています。2004年に JEEF 憲章というものを作りました。それを紹介します。それから成り立ちと組織と事業についてお話しします。



【私たちの使命 JEEF 憲章】

私たちが大切にしている『自然体験を通じた環境教育』は、「人と自然」「人と人」「人と社会」をつなぎ、地域に根ざした生き方、暮らし方を深め、新しい社会のライフスタイルやビジョンを描き、創造します。

私たちは、より広い分野との交流や協力を進め、広範な環境教育の実践や推進のための仕組みづくりを通して世界の課題である持続可能な社会づくりに貢献します。

これが私たちが合意した JEEF 憲章です。ぜひ心に刻んでいただければと思います。

成り立ちとしては、20年前に清里フォーラムがここで行われたのが最初です。5年後に本を出版しようと決めて、約束通り小学館から「日本型環境教育の提案」を出版しました。本を出版して解散しようかという話だったのですが、400人以上のネットワークができたところで解散してはだめだという声上がり、任意団体日本環境教育フォーラムが生まれ、5年後に社団法人日本環境教育フォーラムを設立しました。

組織としては、理事会というのがあり、理事24名、監事2名、内常勤の理事は1名でその他の理事は非常勤です。会員数は団体・個人正会員が約100名、団体・個人普通会員が約900名、賛助会員(協賛企業)が15社、事務局は新宿区新宿5丁目にあり職員12名(+インドネシアに1名)の体制です。事業については大黒さんからお話しします。

環境教育、自然学校、自然体験活動、ESD をキーワードに、日本環境教育学会(1990年)、自然体験活動推進協議会・CONE(2001年)、持続可能な開発のための教育の10年推進会議・ESD-J(2003年)と、どんどん仲間が増えていきました。

(社)日本環境教育フォーラム事務局長 大黒栄二

JEEF の事業については、3つ柱があって、「環境教育の普及」「自然学校の普及」「途上国の環境教育支援」を基本方針に行っております。事業には主催事業、国際事業、行政との連携、企業との連携という形態があります。

主催事業は今回で21回目となる「清里ミーティング」、理事の方が中心になって実施していて卒業生もここにたくさん見えています「自然学校指導者養成講座」、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校ローレンスホール科学教育研究所が開発した、科学と数学と環境に関する体験型教育のプログラムを、ジャパンGEMSセンターを作って日本語化して普及する「GEMS



普及プロジェクト」、全国各地での「環境教育地域ミーティング」も共催あるいは協賛という形で実施しています。

国際事業の主なものでは、「インドネシア環境教育支援が」ありますが、これは主催で日本経団連やトヨタ自動車から助成金をいただき、インドネシアに職員を1人派遣して環境教育普及のベースを作っています。また、行政受託事業で「日中韓環境教育プロジェクト」などを行っています。

行政との連携事業では、昨年頃から行政の事業は競争入札や企画競争で、企画書を出して採用いただいたものになります。

「自然大好きクラブ」は情報提供で、環境省上のホームページ(<http://www.env.go.jp/nature/nats/>)にいろいろなコンテンツを出しています。「愛・地球博 森の自然学校・里の自然学校」は、川嶋さんが中心になって2005年に50数万人を地球博の中で集めたというものです。これも継承事業として今年から、森の自然学校跡地で愛知県の「森の学び舎」という事業をJEEFが請け負って実施しています。

企業との連携事業は実はたくさんありまして、社団法人設立前から始まって今年15年目になる損保ジャパン「市民のための環境公開講座」、10回を越えています「NEC 森の人づくり講座」、本日午前にワークショップをしました「コスモ石油エコカード基金・学校の環境教育支援プロジェクト」や「アサヒビール環境文化講座」「王子の森自然学校」などこの他にも、去年から今年にかけて企業の簡単な社員のための環境教育などを含めると、大体50社ほどの企業とおつき合いいただいております。

司会：JEEFの20年の活動を非常に短く説明しましたが、ここで出てきたキーワードに馴染みがない方もいらっしゃると思いますし、せっかく会員になった最初の会ですので、JEEFについて質問がありましたら受けたいと思います。

質問：自然体験活動推進協議会・CONEの活動内容と、JEEFとの関係を教えてください。

回答：活動内容は、自然体験活動の指導者の養成をずっとやってきました。そのために必要なカリキュラムを作ったり、指導者になっていただいた方々に活躍していただけるような場を提供してきています。ただ、ここ数年あたりから指導者を養成するだけでなく、各地域での指導者をつなげるネットワークをつくったり、今朝も行政との協働についてのワークショップをしましたが、行政と民間をつなぐ役割をしたりしています。会員は約280団体(一部個人)、登録指導者数は約25,000人います。280団体の中には自然体験を生業にしている方から、塾や自治体の方など様々な方に会員になっていただいています。理事の数は45名でJEEFの倍です。(CONE事務局長：太田原康志さん)

JEEFとCONEの関わりは、「自然学校宣言」シンポジウムや経団連の方や役所の人に入っていたいで「自然が先生全国市民の会」を実施したのをきっかけに、そのままではもったいないからということで、CONEという団体を立ち上げることにしました。文部科学省の予算をCONE設立のために2年つぎ込んでいた

だいて、全国から90名程の方々が集まって共通のカリキュラムづくり、各団体の指導者の登録制度づくりをしようとしたことがありました。共通の役員などいろいろなところでJEEFとリンクしていることが多いです。一応の役割分担で、環境教育はJEEF、自然体験活動はCONEとしています。280団体は青少年教育団体が多く、プロ・アマ渾然一体している状態で、全国規模の団体から小規模の団体が登録しているのがCONEです。(CONE副代表理事：佐藤初雄さん)

司会：それでは後半、岡島さんにお話をいただきます。岡島さんは読売新聞の環境担当の記者を長年してこられ、その後、社会的な影響を与えていくためには、NGOが企業や政治家や行政と連携しながら大きいものにしていかなければならないと、高い視点でいろいろなところをつなぎ、動かしてきました。たくさん理事がいますが、JEEF事務局に席があるのは岡島さんだけで、その理事長の岡島さんから、どんな社会的な役割を担ってきて、どんな課題があるのか問題提起いただければと思います。

「JEEFの社会的役割と課題」

(社)日本環境教育フォーラム理事長 岡島成行

今、川嶋さんと大黒さんから大体のアウトラインを話していただきました。私からは、社会的な役割とこれからどうしていけばいいのかということをご説明して、尚且つ問いかけて皆さんから書いていただいたことを元に、また理事会でいろいろ考えていくということでお話させていただきます。



先程お話がありましたように、JEEFは1987年にここで生まれました。90名程集まって、その時は自然学校をつくろうという話でした。自然体験をもっともっとやろうということで集まった人達は、その頃自然学校など経営できませんでした。その頃は変わり者の集まりで、到底食えないものに対して一生懸命やっている人達の集団でした。出だしは自然が好きだというのが一つありました。そこで当時環境庁の瀬田さんや日本自然保護協会(NACS-J)の横山さんや日本野鳥の会の小河原さんなどいろいろな方と相談しながら、自然体験だけではなく環境教育に幅を広げておいたらどうだろうということになって、清里フォーラムから翌年には清里環境教育フォーラムに、それから日本環境教育フォーラムに名前が変わって、比較的的自然の中で遊ぶことは重要視していました。理事の名前を見ていただければわかるように、半分くらいが自然体験関係で、そのような特質があります。

その10年後(1997)に、当時環境庁自然保護局所管の社団法人

人になりました。この時、資金が足りなくて財団法人になれませんでした。社団法人は資本金2,000万円、運転資金5,000万円ということでしたので、社団法人になりました。いろいろな会社を回って資金をいただいたのですが、1,000万円までしか集まりませんでした。小学館が残りの半分を出して下さったので、この会が生まれたのは小学館のおかげです。社団法人になり、事務局もそれまでは細々と4、5人でやっていたのですが、社会的な責任もあるということで正職員を増やしていき、現在は13人になりました。当初、私が記者で環境問題を書いていた頃は、まだ経団連と環境庁が同席しないと、公害の名残りがあって環境というよそ様となかなかつき合わない状況でした。環境保護団体は本当に限られていましたし、NACS-Jは戦いの連続でしたね。

ですから、我々の社会的役割としては難しいことの一手前前で、何となく皆に自然と仲良くなってもらおう、ということがスタートでした。どちらかというと、NACS-Jが第一線で戦っているのに対して、JEEFは一步引いた、後ろで食料を炊いているという状況がありましたので、JEEFは比較的、企業や行政とも話がしやすかったです。また、JEEFを立ち上げた頃の理事は、お金はなかったけれど経営者が多かった。このように、最初からあまり環境を主張するような団体ではなかった。当時から我々は自然が好きな人に広めるのは簡単だけれど、新橋あたりで飲んでいるおじさん達に環境教育をわかっていただくためにはどうしたらいいか、彼らの目線に立たなければだめでしょうということで、日本を支えている企業戦士のような方々に納得してもらえるような環境論もしくは環境教育論を実践していかないと広まらないだろうと考えました。

アメリカの環境保護団体の規模の大きさは、いちばん大きいNWF(National Wildlife Federation)が約500万人という会員数で、会員数100万人以上の環境保護団体が6つも7つもあって、小さいといっても10万人くらいです。日本では、日本野鳥の会が大きいといっても4.5~5万人くらいです。100倍違うわけです。どうしてだろうということがあって、何とか環境教育・環境問題を一般の人に普及しなければならぬ。日本の場合は好きな人だけが集まって、仲間を作ってしまう。あんまり好きじゃないけど時々そういう所に入ってみたいという人がたくさんいて、そういう人達にも影響を及ぼさないと、国全体で考えたらいつまでたっても環境教育など普及できないだろう。そういう考えがありまして、企業には積極的にアプローチしてまいりました。おかげで、今は50社くらいとおつき合いがあります。しかしこちらは、環境教育をやるためです。企業や行政からも、こういう仕事を一緒にやりませんかという問いかけがかなりありますが、我々の理念から外れたことはやっていません。おいしそうな仕事もありますが、我々の理念と合わないことはだめです。ムシキングというゲームがありますが、あれは外来種が勝つので、そのゲーム会社から一緒にやりたいという話がきたのですが、提携しませんでした。企業と日本をある程度支えている部分の、頑張っているおじさん達にわかってもらうというのが、大きな目標でした。

もう1つは、途上国の環境教育。中国・インドと私も取材を何度もしてきて、日本もいろいろ援助していますが、やりきれませんよ。あんな大きい国で人口も多くて、それがどんどん環境を汚していったら、その後始末などとてもできない。せめてできるとすれば、環境教育ですね。中国・インドの方が自分達で環境を汚さないようにするという意識を持ったら、それなら少し可能かなと考えました。日本の国だけの環境問題ではなくて、これから温暖化の問題でも何の問題でも、中国・インドの動向が世界を動かすわけですので、中国・インドなども頭に入れながら、特に日本に近い所でアジア各国の途上国の環境教育支援にかなり力を入れて8、9年やってきています。インドネシアからスタートして、インドネシアには一人常駐職員を置いています。こちらもこれから非常に重要な作業になってくると思います。

このように3つの柱を重点的にやってきていますが、その中でこれからは国際性が問われてくると思います。3年前にアラスカでアメリカの環境教育学会があって、関係者が出た時に予算規模と人員などの話をしたら、そんなものはない、大軸を支えているものがあってその中で環境教育をやっている。しかしセクションとしては非常に小さい。環境教育だけをやるNGOというのはいない。NAAEE(North American Association for Environmental Education)には会員が5万人くらいいますが、事務局が4、5人でやっている、ということでした。IUCNなども提携していろいろなことをやっているのですが、環境教育というのはIUCNでも予算が非常に少なくて困っているという話です。考えてみると、環境教育だけやっていて、企業や行政ともある程度対等に付き合っている団体というのは、世界にもそう多くないということですので、アジア環境教育グループや世界の環境教育の仲間というもの、そろそろつながっていかねばならないと考えています。

そして我が国でも、このところ温暖化などで一般の方も関心を持つようになっていただきましたけれど、基本的にはまだ自分達の生活を少し注意していこうという人は非常に少ない状況です。もっともっと環境教育の重要性がある。それからもう1点、先ほどのことに戻りますが、日本の子ども達は自然の中でほとんど遊ばなくなってしまっていて、これが10年後20年後になると大変な大きな問題になってくると思いますので、途上国支援と子どもと自然はかなり大きくやっていかねばならないと思っています。世界的にも環境教育をきちんとやっているところは少ない。行政がやっていますけれどNGOとしては少ない状況ですので、まだまだ我々としてはやらなければならないことはあるのではないかと思います。幸いにして今回も行政・企業の方にもたくさんおいでいただいています、皆さんとお話する機会もあります。

JEEFとしては以上のようなことを頭に描いておりますので、そういうことも含めて皆さんからのご意見をお聞かせいただければありがたいと思います。

司会: 岡島さんありがとうございました。企業・行政だけの方

ではなくて、国際協力に携わっている方も何人もいらしていますので、これから国際的な活動が広がっていく時にお力をお貸しいただきたいと思います。ではこれから、4人組くらいでJEEFを活かして JEEF でやりたいことなどについて話し合ってください、いくつかお話を聞かせてください。

村井孝一さんグループ：

自然体験などの基本的なルールなどを子ども達に教えてあげて、自然学校などが主催するイベントではなく、日常的に彼らが子ども達自身で遊びながら、同時に危険なことに気をつけながら子ども達同士で教え合えるような、最初の仕組みを作ってあげることが肝心なのかなという話が出てきました。また、JEEFのHPなどに川・山・海での子ども用の安全管理マニュアルをわかりやすく作ってあげると使いやすいのかなという話も出ました。各地域・フィールドで安全管理の適切なプログラムを提供する人材の提供という話も出てきました。



渡邊純子さんグループ：

JEEF マークを作って、環境配慮・理念・継続性のある施策に付与する。JEEF は人材養成やプログラムの監視・監査を行い、企業はそれで安心を買うわけです。企業としては、リスクヘッジや評価基準の明確化にもなるので、結果として皆が気持ち良くお金が動いて、子ども達が正しい道筋で豊かになることができるのではないかと思います。ということで、JEEF の認証マークを作る、です。



佐野良介さんグループ：

環境教育にこれから関わって行ってプロになりたいと思っている若者向けに、1年に何回か、若者だけのコミュニティのようなものを開催する。自分の専門分野をもっと活かすためにどうすればいいかというアイデア出しも含めて、2泊3日のミーティングのようなものができたらいいなと考えています。

原田礼さんグループ：

初参加の多いグループの中で、清里というこの場所自体にはすごく魅力がありますが、遠方から来る時にそれだけの価値は見出しながらも財布事情が厳しいという意見がありました。地域ミーティングとの連携の仕方とか、そこに関わったときにこちらの方がちょっと安くなるとか、何らかのシステムがあったら嬉しいなという意見でした。



司会：皆さんが会員だということで、関わりのある一員として、他人事だと思って何とかしろというのではなく、自分も何か関わりたいという思いも込めて提案・要望、自分ができること提供できることなどを用紙にお書き下さい。理事は2ヶ月に1回ほど運営委員会をしていますので、そこで話題にさせていただきたいと思います。そして、前から世代交代といわれていますので、我こそはと思う方は手を挙げてほしいと思っています。皆さん、どうもお楽しみ様でした。

3 日目

全体会・開会式

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム理事 河原塚達樹

全体会

テーマ別「今後の戦略会議」報告

地域ミーティングの報告

閉会式

閉会挨拶 : (社)日本環境教育フォーラム常務理事 稲本正

3日目 全体会

司会：(社)日本環境教育フォーラム理事 河原塚達樹

それではこれより『日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2007』の全体会・閉会式を始めさせていただきますと思います。

まず最初に、今朝行われたテーマ別「今後の戦略会議」の報告、それぞれのブロックから地域ミーティングのPR・報告を1人1分でしていただきたいと思います。その後、清里ミーティング 2007の総括といたしまして、(社)日本環境教育フォーラム稲本常務理事からご挨拶をさせていただきますと思います。



テーマ別「今後の戦略会議」の報告

障害者と共に展開する環境教育活動から全員参画の社会づくりへ

報告：小林修さん

昨日のワークショップと関連するような形で戦略会議をしました。そもそもワークショップなどで人を集めるためにはどうしたらいいのか？ということで、まず皆さんのワークショップ・戦略会議の分析をしました。皆さんが展開してきたのは実践系、試行系、大御所系といったものがある中で、今回のこのタイトルは何に分類されるのかわからないという問題が浮き彫りになりました。来年、視覚障害者のためのというよりは、視覚障害者が持続可能な社会づくりに重要な役割を果たすのだという観点でやろうと心に誓いました。



体験型展示物を評価しようパート2

報告：河野宏樹さん

いろいろな体験型の展示物が日本全国にあるというのはたくさん見てきました。まわす、めくるという動作が伴うものに注目しながら見てきました。途中でめくるとか、覗くとか、エロティシズムじゃない？という意見があって、エロティシズムにテーマを絞っていくといい展示物ができるのではないかと。夜の秘宝館なんて作ったらどうかという話も出たのですが、まっとうなテーマにならない気がしたので、お悩み座談会のみみたいな、今こんな展示物を作りたいのだけれど皆さんから意見はありませんかという話にしました。例えばミサゴを捕まえる時の展示パネルの仕掛けとか、そんな話を繰り広げていました。



川遊びのルールを広めよう

報告：村井孝一さん・波多野諭さん

最大のポイントは子どもと一緒に川遊びでは、安全面が一番の問題だということで、そこをテーマに話し合いました。ビーチサンダルと踵のあるサンダルではどっちがいいか、ジーンズと短パンではどっちが安全かという、本当に身近な安全からフィールドの安全、僕達が気を配れる安全ということで、いろいろな安全を考慮しながら話し合いました。フィールドサインなどを活用しながら、川遊びのルールは変わっていくと思いますので、皆さんで考えていきましょうということになりました。



スタッフトレーニングどうしてますか？(研修制度含む)

報告：菊池早苗さん

私共の施設でもスタッフトレーニングやスキルアップをどうすればいいのだろうということで、この会を設けさせていただきました。ホールアース、NOTS、ねおすの皆さんからいろいろお話ししていただきました。これといった結論は出ていません。これから一体何をしていけばいいのだろうということは、個人個人で考えていかなければならないのかなというところで終わってしまいましたので、また機会があれば、皆さんもっと建設的な話をしていきたいと思っています。



企業と環境NPOの協働を進める戦略会議パート2 報告：中野民夫（JEEF 理事）

36～7 人の参加をいただいて、6 つのテーマに分かれて取り組みました。その中の1つで、「企業と環境NPOの協働を進めるための〇ヶ条づくり」というのを昨日から続けてまとめたので、ご紹介します。1. 目的：お互いに何をしたいかはっきりさせよう。共通の大きな目的を築き、関係者全員で共有しよう。2. ストーリー：目的を達成するためのストーリー、時、場所、体制、仕組みを事前につくって始め、試行期間も設けよう。3. 相互理解：独自性・専門性・予算決算などの情報開示を進め、対等な視点で、相互理解を深める努力を重ねよう。4. 評価：評価しあえる共通の価値基準を築き、あらゆる場面で、率直に相互評価しよう。5. 成果：得られた成果は共有し、批判と賞賛を共に受け、NPOに適正な報酬を支払おう。



子どものための環境教育 報告：山崎絵梨奈さん

今、環境教育は様々な面で支援もされ熱くなっていますが、子どもが不在なんじゃないかというキーワードで話しました。最初にどんな思いでここに来たかという話では、子どもに幸せになってほしい、こういう子どもを育てていきたいという夢がたくさん出てきました。話し合っていくうちにいろいろ見えてきた問題を分類すると、その困難さは、実は私達が解決できることと、危ないからなどの理由で、やらせなかったことによって問題が出てきているのではないかと、それを解消するために私達に何ができるのかを考えました。最後には、どこかに手をつないでくれる仲間がいることが私達のこれからの活動を支えて、私達が幸せであることが子ども達を幸せにすることにつながるのではないかと、涙ながらの会を終えました。



持続可能な暮らしをしたい人の会 報告：加藤大吾さん

自分で持続可能な暮らしをしちゃおうという人が6人集まりました。私の家をどうやって作ったのですか？という話をしながら、皆さんが持続可能な暮らしができるようにいろいろな話をしました。じゃあ、どんな家に住みたいのかという話で、こういう家が持続可能な暮らしの家なのではないかという、一人ずつ自分の夢を描くという時間にしました。



アジア的・日本的・地域に立って語ろう ～日本的でいこうパート3～ 報告：新田章伸さん

今日で日本的でいこうパート3となりました。私、構想1年、思いを持ってやってきました。今日は稲本さんにお話をいただき、何名かに発表していただいて、みんなで自由に話すという形で、日本的ってなんだろうについて考えました。日本的というのは、足元を見つめていこう、自分達がちゃんとした自然観を持って活動していくことが深まるのではないかと、それを大切にしようということをお話ししました。



清里でパナソニック AVC ネットワーク労働組合の未来を考える（クローズド：見学はOK） 報告：空野仁志さん

今回8人のメンバーで参加しまして、すみません、クローズドな勝手な身内会議をさせていただきました。参加したメンバーは我々の組織の未来、中期方針を立てるというプロジェクトメンバーで、ここで聞いたこと感じたことを少しでも我々の組織に活かせないかなと、そんな論議をしていました。個人的に思っていることですが、我々は労働組合ですが、皆さんの職場は元気でしょうか？ということで、世の中の労働組合という組織が少しでも皆さんと一緒にできることがあればなと思っていました。



ヤングの集い 報告：來住怜美さん

集まった10人でグループワークを行いました。今後どんな社会にしていきたいか、そしてそのために私達にはどんな行動ができるか、ということをお話ししました。いろいろ話し合っていて、自分達ができる行動は、まずここでつながりを作ること、コミュニティを立ち上げようという話になりました。コミュニティの活動の目的は、つながりを維持することでモチベーションを保ち、最終的には若者で社会を盛り上げていこうということになりました。mixi内で具体的に自分達のイベントの情報交換や活動の近況報告をしようということになりました。今後、岐阜県立森林アカデミーで春休みに第1回の集まりを行う予定です。YEES (Youth Environmental Education Society) がコミュニティ名です。



日本の食糧自給 UP！ 都会・若者へ農業環境教育をどうやっていくの？

報告：高麗正紀さん

私の趣味で設定した会で、10人くらい集まりました。もぎたての楽しさをどうやって広げていこうか？農業を全く知らない人から、ちょっと知っている、関心はあるけど関わり方を知らない、その段階的に皆さんの立場で、それぞれやっていこうということでまとまりました。



学校との連携について

報告：森田孝道さん

初日の「今旬」で学校団体とのつきあいについて発表しました。話し合っ出てきたキーワードは、①共通言語、②相談型、③学校の事情をよく知ろう、です。③は、学校の置かれ



ている環境は非常に複雑で、予算、人事等々、我々がまだまだ知らないことがあって、これを知らないことには始まらないだろうということです。②は、パッケージプログラムはこうですよと提示するのではなくて、先生方がどういったねらいを持って活動したいのかを我々が共有してデザインする、一緒に提案していくということです。①は、例えばプログラムを作ったとしても、それは我々の言葉で書いているものです。それを教案という言葉がありますが、学校なりの言語に書き換える、そのための勉強ということです。これが皆さんのお役に立てればと思います。

「せいぶつたようせい」を3行で語る会

報告：本間慶子さん

生物多様性をキーワードで言うのは簡単ですが、それを3行でどう人に説明するかということで、7人のメンバーが句にまとめました。「シジュウカラ



コガラヤマガラ ゴジュウカラ」「落ち葉踏み 命育む 声をきく」「この世界 たれ死すとも 富士の山」「多様性 あらゆるものの 可能性」「にぎわいを 生かすも殺すも 人次第」「多様性 複雑怪奇 悩ましい」など様々な表現がありました。皆さん、各々でヒットしたものを誰かに伝える時、この3行で説明していただけたらと思います。

地域ミーティングの報告

北海道ミーティング 報告：上田融さん

開催予定：2007年12月15日・16日の日帰り2日間、札幌市環境プラザで開催。

内容は？：12月に2日間で行いますが、それとは別に2008年2月にその中での活動を凝縮した内容の体験屋台を展開する予定です。



東北ミーティング 報告：高田敏幸さん

開催予定：2007年11月23日～25日の2泊3日、福島県奥会津の三島町で開催。

内容は？：この週末の連休に行きます。福島県奥会津三島町はとっても山の中です。奥只見線というSLが走っていて 日本の原風景がまだ残っている所で、素晴らしい所です。田舎をテーマに環境教育をやろうということで実施します。是非お越し下さい。お待ちしております。



関東ミーティング 報告：金久保優子（JEEF事務局）

開催予定：2008年2月9日～11日までの2泊3日、群馬県の国立赤城青少年交流の家で開催。

内容は？：現在、分科会の内容等を詰めているところです。参加費は10,000円です。どうぞ皆さんお越し下さい。



中部ミーティング 報告：山田俊行さん

残念ながら今年度は具体的にいつ開催するのか、決まっておりません。実は、昨年度から地域ミーティングをどう進めるのがよいのか、メーリングリスト上で議論されています。今度2月か3月に一度集まって今後どうするかを決める会をしようということになっています。



千刈（関西）ミーティング 報告：新田章伸さん

近畿で14年続きました千刈ミーティング、今年はお休みです。来年からは自ずから然るを待つ、です。



中・四国ミーティング 報告：小林修さん

開催結果：2007年6月22日～24日の2泊3日に島根県三瓶青少年交流の家で開催。

内容は？：50人の参加を得て実施しました。来年は目標80名で、6月に開催する予定です。第1回目の実行委員会を今週24日に岡山で開催します。

開催予定：2008年6月20日～22日に、愛媛県大洲青少年交流の家で開催予定。



九州ミーティング 報告：浜本奈鼓さん

開催予定：2008年3月1日～3日の2泊3日、鹿児島市中央公民館、県内集落先進地で開催予定。

内容は？：実は、今年は皆さんいらして下さいと言えません。1日目の土曜日に我ら無限界集落人という意味で、集落力をテーマにした、一般公開の大きなシンポジウムをします。その後ずっとバスでどこにも外さないで移動し続けて大隈半島など、日本一の集落力によっていろいろな活動をしている集落の方達をフィールドワークで回ります。限定35名で九州外からの参加枠は5名しかありません。どうしてもという方はお早めにお申込下さい。



エコプロダクツ展 報告：川嶋直（JEEF理事）

開催予定：2007年12月13日～15日の3日間、東京ビッグサイトで開催。

内容は？：日本経済新聞社が主催で毎年12月に東京ビッグサイトで行っていて、今年9年目です。ここにJEEFのネットワークを中心に企業とNPOとの協働の事例紹介のコーナーが今年でき、9つの企業とNPOとのネットワークの事例紹介があります。企業がどんなことをしているのか一望できますので、お寄りいただければと思います。



閉会式

閉会挨拶

(社)日本環境教育フォーラム常務理事 稲本正

皆さん、お疲れ様でした。

ご存知かと思いますが、今年、アル・ゴア氏とIPCCがノーベル平和賞を受賞しました。去年がワンガリ・マータイ氏でした。平和賞と言っていますが、現実的にはこのところ環境のことに与えていますね。それだけ環境が世界的にも広がってきたということです。

清里ミーティングも20年を越えて、来年5月くらいに20年誌を出します。これから私達の任務は、ますます重要になっていきます。その中で「Think Global, Act Local」とよく言いますが、世界を見つめ地元にどう接するか、世界にどう接するか、本当にきちっとやっていかないといけない。

今年も新しい人が多いですね。逆に古い人もたくさんいらしていますね。広がっていかねばいけないので、新しい人が増えるのはすごく嬉しいことです。理事もそろそろ年をとって、僕も岡島もこの辺の理事はもうすぐ辞めますから、新しい人に頑張ってもらわないといけない。20年やってきて、JEEFも果たして持続可能かどうか怪しかったですが、皆さんのおかげと僕らも努力をして、何とか持続してきました。いろいろな団体の皆さんがいらしていますが、やはり自分自身の持続可能を考えないといけません。家を作るという話がありますけど、家を作ってもダメですからね、それは器主義です。日本の行政が間違えてきたところで、箱物を作ってもダメで、やはり中味ですね。中味をどう作るかということ、それでなおかつ持続可能にするということ。これはいろいろな意味があると思います。

生態系のことや生物多様性のことが話題になっていますが、生物多様性を考えるという、一番最初は宇宙の歴史を考えなければならぬ。ビッグバンから始まったわけですからね。原子は水素から始まって、原子は素粒子から始まったわけです。やはり地球が始まってからの地球史を考えたいので、生物史を考え、人間の歴史を考え、その歴史の中で生物多様性をどれくらい僕らは壊してきたかを考え、それから近代どうなってきたかを考え、近代合理主義を超えなければダメです。それを超える五感を持つことは、環境教育の一番の大切な柱だと思っています。ですから20年経ちましたが、やることはまだまだあって、第一歩です。ぜひとも皆さん頑張って下さい。

注目されていることはいいことですが、注目に応えないとだいたいブームは去ってしまいます。環境教育はある意味ではブームなのですが、ここ数年がかなりヤマだと思っています。これをうまく越えると日本は、特に環境教育は本当に定着します。それはいろいろなデータがあるのですが、物事が広がるためには、イノベーターという人達がいて、その次にアーリーアダプターという人がいて、その後にアーリーマジョリティという人がいて、今明らかにアーリーアダプターからアーリーマジョリティに移るギリギリのところです。ドイツは移り始めました。



日本は移るかどうかがギリギリのところなので、これを移らないとたぶん皆さんの組織も持続可能でなくなると思います。ですから、移れるかどうかの瀬戸際であるということをよく考えて下さい。

もう1つ、IPCCのパチャウリ議長に会ったことがあるのですが、2018～2020年がターニングポイントと言われています。今から10年後くらいです。そこからいくら人類が環境のことにいろいろ手を加えても、たぶんダメだろうと思う。CO2濃度は加速度的に上がっていますからね。皆さん、ぜひ10年計画を立てて下さい。10年先にどこまで自分達ができるかが、たぶん地球環境の将来を決めることになると思います。個人的に持続可能といっても、CO2濃度が今、380～400ppm近くあって、これが500～800ppmいってしまうとダメだと言われています。このままいくとそれくらいになってしまう。日本のことだけ考えていてもダメで、アメリカや中国のこと、とりわけ中国のことを考えなくてはならない。この20年の環境教育の中で「気づく」ということやってきました。そろそろ皆さんも気づくだけではなくて、何か具体的に成果を上げたり、モデルを作ったりという段階に入らなければいけない。それで成果が上がってくれば、マジョリティになれると思いますね。その辺のことを考えた10年計画というものを期待しています。

いずれにしてもいろいろな議論があって、僕も今回は初めから終わりまで参加しました。トヨタ白川郷自然学校も少し引き継ぐことができたので、もう少し全世界的とか全国的に見て、地域ミーティングにもできればがんばって行きたいと思っています。もう1回、環境教育が日本で本当に根ざして世界まで行けるような次の10年を、どうプログラムしてどう実践するか、僕達も頑張りますので、ぜひ皆さんよろしくお願ひします。